芭木亭歌集標注 三

特別
イ4
3163
98(3)

貴
14
3163
98(3)

散木弃(奇イ)謌集 巻(イ) 第五

祝部

堀川院の御時に立春の朝に山前にて今日乃ん
ナシイ
ぬとめと宣旨をそれハつゝ(うイ)毎つまる

千載 神中
月詣
[illegible]

百首歌の中に祝乃ん[illegible]

金葉 类題
堀百
[illegible]

高陽院殿(ナシイ)の歌合に祝の心をよめる

千載
[illegible]

神中抄云若水とハ立春の日主水司の大やけに奉る水を云之案内をしらぬ人ハ正月元日奉るよし申す僻事之

六百番哥合十四番 右 經家
君ゝ代ハ[illegible]ふつむ東ハおくつゆ乃つゝとりてふちとあらむ代までに
左方申云右哥あやうに俊頼朝臣松の上葉におくなるのと云哥に似たり云々
高陽院歌合祝左持 松津
千代ふき君とやれハみるさゝ[illegible]
[illegible]

右 俊頼
おちたきつハ千うち川のつゝせにも云々
井蛙抄云是ハ晴の哥の本体ニ[illegible]
河社云万葉に物部の宇治川とも物部の八十宇治川ともつけたるハ共に物部の氏ニつけて物部ハ氏々の多くれハ物部の八十氏川ニハつけたり然るを物部といふをして八十氏川と云る哥ハおちたきつハ千氏川の云ニこれ始めやこのたゝ八十氏川と云ハ荒原にあれ[illegible]

新勅撰　長家
神無りのこゝろ行乃しらきくハ
久しさ杉のしるしなりけり

作者部类云藤原通俊　大貳経平男

作者部类云中宮大夫源雅忠　後
久我太政大臣男
[illegible]ハ磯馴小ハあらハ橿の杵　兼考
信し

山城名勝志云今樋爪村在古阿村南十
町許
山槐記小火爪園大暦小樋爪と作り
石清水御幸記宇治拾遺ならふ樋爪
橋ゝゝなり

[illegible]殿にて松契遐年といふ(ふイ)ゑをよめる

类題
たゝらめといはゝの松ハ以ハ[illegible]ハ[illegible]みよのしるしとそ[illegible]
[illegible]

夫木
[illegible]

治部卿通俊の(一イ)八宗の[illegible]水石契久といふ[illegible]を

ヤイ
[illegible]川をたれ[illegible]のかみよ[illegible]

类題
中納言雅定(たゞイ)の家の[illegible]

夫木
たゞ(まロ)けけ[illegible]

神中　万代
[illegible]

修理大夫[illegible]

[illegible]

百錬抄云長治元年十二月五日辻幸
中宮御所堀川院去八月十日中宮
先移徙先是開白領也被譲進之

後拾遺賀　兼隆
[illegible]

寛治七年五月五日朝間天晴小雨
下午後頗得晴今日新女院女房之
根合也云々

百錬抄云寛治七年五月五日郁芳
門院根合兼日定両方念人有歌合
盖大儀也

萬葉集六巻
濱清浦愛見神世自千船(ハツル)湊大契
乃濱

类題
[illegible]

堀川院御時中[illegible]堀川の内裏[illegible]
[illegible]松[illegible]遐年といふ事をよませ[illegible]
[illegible]

类題
雲のゐる松のうえ[illegible]の本[illegible]
郁芳門院の根合にあやめをよめる

[illegible]代(ハイ)[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]代ハ[illegible]

日本紀成務天皇紀云山陰曰背面（ソトモ）
そともハ背津面の義也万葉集ニ背
友とかけり後世外面とかきて其意き
こゆることゝいへり

禁秘御抄云所衆員数廿人也又有
官不可過二人
職原鈔云所衆六位侍可然之輩補
之
名所集覧云位山山城葛野郡龍安
寺村北衣笠山の西ノ峰をいふ按ニ
位山ハ多く位の事ニよせて位の昇
ることを云かけたる山ノ部ニ出せ

二条関白殿にて松経（影イ）浮水といへる心をよめる

夫木 類題
底きよみ池のみきはにあらはれて松かけをうつして世をへぬらむ

堀河院御時所充のものによみ侍りける所衆にかはりて

松樹契久といへる事をよめる

夫木 類題
くらゐ山みえける松のかけにゐてたのむ身さへ千年をそふるなれ

中宮大夫近衆の御堂（室玉）にてうくらせ給ひて松久緑といふ

いつる年をとよませ給ふによめる

玉葉 類題
松影のうつるやとの池水はみなもよりこそ千代やまさらむ

祝の歌とてよめる

君か代をかそふるませていはひつることしもおほち千年積りませ

壬二集中
万代は君かすへらきしるしかや やかましその風もかほるとは
萬葉集十五巻ニ皇神能伊都久志吉国
と云り愛をうつくしと訓る通り
同六巻ニ天皇朕をすへらきとよめる於
すへらとのみもやつし
神代紀ニ百姓をおほみたからと訓り
紀中ニ黎庶、公民、兆民、人夫なとをも
よめり

永縁奈良房歌合　上総君
春日山ちよふるまつのこすゑには
万代すめる君かなめる
後判云春日山松とふことかなて
いと好し

本朝文粋匡衡云洛城有一形勝世
謂之東三條昔是大相国之甲第傳
為左丞相之花亭云々

堀河院御時御前にて人々祝の心をつかうまつり
しによめる

続後拾 万代 類題
君か世もみちをたのもし浜千鳥ややよろつよとなくにまかせて

新院より法扇を給ひて返ししてまかりいてしに
祝ありそれはつかうまつりける

いつしかとつかふるはしめもみかさのもれなき身まて千代を重ぬる

春日大夫に實の許にて祝の心をよめる

かすか山いはねにかゝるさかきはいく万代の末もしけらむ

摂政殿下の中将とまうしける時東三條殿にて池上
松といふ事を人にかはりて

新拾遺賀　等持院

風のうへにはをうつして池水の波もよせのうきふねのうらしま

金葉集　經信

池のひろいはのうへにふきしきの波のうちのくもぞきえける

齋宮式曰凡天皇即位者定伊勢太神宮齋王仍簡内親王未嫁者卜之齋宮記云倚子内親王　白河皇女号樋口在任廿四年　天永二年

鳴の羽撥の音鐘の響ふくるゝ勢陽雜記云字田　齋宮村の南有糸村の執ふある田畠の字也今字田ゝ云里八郎齋宮有糸川等の里ゝより耕作をしるがり

萬葉集土巻ゝ伯耆の国つゝき本ゝ我隠せる妻云ゝ同一巻ゝ出五百枝槻の木がしたゝめり

夫木　あしたづのきゐるいけなの池（松ノ）ゐれば波もやすせの数ゝ立てしら雪

又おなじ心を

池にさすはのもひえにふゆるたゑと波のおるゝおりひそうしの舟

伊勢の秋こゝろを詠ける法守甲といひしゝあけぼのにしこきのおとのしるをまてしらめる

夫木秋五　あけぼのゝこゝろよりたつ鶏のそゑのくるまや家代の負

祝のこゝを

いまひおきし志めのうちに志めしてもみゆるこゝろかれ

夫木　水のもとに志ろのとしの夫（イ）ゆふこゝろ志てあそ夫（ウ知）も夫らよろ川代のこゝめ

夫木　君が代はおもはせやちのをしえつきもえぬらもさゝえ鳥すゝれ

古今集　六帖

たのしきはれば君も松おひにけり　こひをしこひあはさるもやは

後拾遺　為頼

もちがうて千代もめぐらむさゝつるものをよゝまで君はさしもしらんめむ

花鳥餘情云長階とは御殿より南殿（のりの廊）和訓栞云長橋の川竹とよめる禁中の長橋を云或は長階とをり

○散木集

千載　神代よりかしこかれやうこそ記侍さいそのは松のたゝをまさきくむ

类題　松栄遥年

まさきの友ゝ宮の家の後の森をあそはされけ

る夜月のおもしろさにふかけらけどうてすよめ此をあ

らはれはいよよある

くもり侍る君がちとせはさすつきはひかりをさへもさしそふるかれ

夫木　中納言雅定（卿イ）の家にて鶴契遥年といふ事をよめる

类題　松のゆきのたむけにふきたひたるたつのおちをふみをしるかな

堀河院時竹栄遥年といふ事をよめる

夫木　うゑしやれもすゑかしはゝけもとしてゝ風ふるる松かな

道饗祭祝詞曰横山之如久置所足
哉

李卓綱目云曜麥一名石竹

上觀云月隠重山挙扇壁言是

後撰集
春日さす我のうらなるうらさけて
夫ーそいつもたのめむ

作者部类云證禪　左大臣俊房公男

人のもさおて祝のこころを

夫ろ代のためしよひろむやちろつ代の数らりてあるのみそふおそくさむ

大武長実にろ白川のふかてこふいそひのんをとそてもある

夫木
夫ろ代のたあしよひろむやちろ神のいーのたけも不老ふそり

祝のうたこと

月ふそ殿をそいたたくれ君をふ代のたけふそくむ

殿下の祝のんを

左日山さそえーぬちの志留こ実もうそのうちとみてそ

小野の大使祝詞を

荀子云學不可已青由於盖而青於
盖氷生於水寒於水
山家集
冬の山ふもとの川のつらゐれ
ひもとくさゝのつらゐれ
詞花集雑賀　事まの君ろの万
ろれ三王とつみて二つふ一をそ
ちてねのそせる
皆むさひろひろむさそえひつ代そ
云ろ集　君ろ　の万を中ふまり
ろくへよろりて　禹内侍
皇ろーろつの庭のろてもろ
そふふあろろわのろてる
大和物語云昔の国ふ前林文初ろ
ろ時ふ神中納言勢使まてり給て
ふれ非の代その都とそくうろな
君ふ年年の給ひのもの一枝之ふ心
事ふ於ろ乱の都とろむつひろる
ふ初ふ西日長ふ日長七尺ふみも
ふそ川を御裳ふ取給てふ長ふそ義
とろろる神名衣台長ふ義ふとそ
後拾遺集　伊房
天ろそろそろむ非の為そ初とい
ふのたけそたつふ川のひろ為
非業時ふ白玉ふそろ為
非のろつやーつむ
新古今　後徳大寺左大臣
八百日行ろ為のまそそを君ろ代の
ろろそろそろ初む沖ふを出守

残ろ秋る

おろろふ初をくそ

伊勢齋宮よ侍そ

そそを給ろるちひをそふのいーるとよみのふ

そそろをつて十のろふろ侍ろ

金葉　类題
ろもろくそそのふ初ふ君ふ代多てもる
続後拾
そさ初る井の給ろろ
君ろ代よみもそ川を
夫木
春美ろ給ろ川やみそれるかみのんもうちらけやる春
風雅
大淀の浜の白そを君ろ代の数よられやみもそむ

和訓栞云平家物語小馬を甲うくとう、やう甲うを於くとう詞かさ〻ひとりたるまゝをうまう

笛川、伊勢齋宮村ふあり

記傳云千引石知現伎伊波と訓て世と書紀宇久戸辨引石とかゝれたる、称の意を顕せる之万葉四ふ吾妹者千引乃石乎七許云〻和名鈔ふ知柒乃石之とあり私記も同し

由たゝ八伊勢国度會郡ゟ勢陽雜記ふ田丸の東とそう

和名鈔云越前国敦賀郡 鹿蒜加倍留

内裡名所百首 順徳院

都人そう山ゟふくるゝ秋のゆふ

さひもそう

夫木

夫ゝ代ゝ年よひそふる心柱をそてまて

夫木

甲うそ知れ大そう山の石竹をいく年とるともおもひそてみる

休

姉そうはのゑ〻そうつとそそつゝ海よ多代をふさ甲うセとや

一本元

夫ゝ代ゝ秋もそうるゝ露を拭うち多くさりて数つもまる

一本元

そうみそうるめ甲そのをそうけてひろひつゝよりのゑよたまろあつへき

夫木

出てイ

別離之部イ

百首歌中よ別をそある

土載 妥題

わそうれよ甲うゝ後よ昭そそて甲すゝ宮のそうつまる

堀百

まてイ

仲中納そ基綱のそうら経そまりよそうりて

新續古今 大納そ経信大弐まめりてつゝ甲うそうふつゝる

周防内侍

都ゟ久ゝくいそのゟゝ甲うそめあゝいあつ世と侍もゝてゝ

作者部類云大蔵卿 行宗 参議基平男

古今集

いひわれてそうそうそのゟの根をそうそてさそうゟ水あゝいかゝとそそう

小町

新續古今

約束よゝいそのゟゝそうる

後イ 彼中納そつゝそかれ経そまて修理権大夫イ 夫ゝ代ゝ宗和をそれたりしそうる

恋ゝそうる袖へゟひくうる多そあゝたをそうて事まそかみそもゝむ

むすゝ玉そうる人のゟのありそうさよ人よつそ

てくそうるゟとそよゝ水のゟゝをそれて修理権大夫イ

てつそをそれて修理権大夫イ

みてつゝそよゝめる

ゟゝよゝくそうれて修理権大夫イ 人よそうそうむ

六百番哥合　經家

別ちのなくなくものをあふさかの
関をぬ行しいまさてえなむ

拾玉集

雲かかる名やちのえを[illegible]
[illegible]やの中山

壬二集

旅人のそでふく[illegible]たちの
さやの中山[illegible]

拾遺集　伊勢物語

[illegible]
[illegible]月の[illegible]

あつまへくたりける人のおくりしてあふさかの（續を）
関にてよめる（剗）

續古今（雲葉）
わかれしは[illegible]あふ坂の関をしもこそ人はわかれて

高階經般（敏代）か相模[illegible]下りて侍るに（不續）父經成

[illegible]

萬代
[illegible]あつまちのさやの中山[illegible]

[illegible]　（一本无）經成朝臣

一本无　萬代
旅衣たちし日数をかそふれは[illegible]の中山[illegible]

男[illegible]まかりける人の[illegible]

[illegible]

江家次第云本朝月令云五節舞者浄御原天皇之所制之相傳云天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄尓之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髣髴應曲而舞獨入聽他人無見之擧袖五変故謂之五節云々

新古今　經重

[illegible]

延喜神名式曰陸奥国亘理郡　安福河伯神社　福下麻の字有之

六條修理大夫集　[illegible]
[illegible]云々

[illegible]云々

人[illegible]秋の野[illegible]

[illegible]の[illegible]人の[illegible]

衣[illegible]つけて[illegible]（ナシ）

[illegible]人[illegible]

みちの國へ[illegible]人[illegible]

[illegible]の別を[illegible]や

[illegible]伊勢へ[illegible]大夫[illegible]の[illegible]

[illegible]馬の[illegible]つけて[illegible]

[illegible]れて[illegible]

小類集（歟）
[illegible]女郎[illegible]の秋[illegible]

四国雑記 加賀国をとおりを過て行くに人のきぬをかけたるを見侍てたれかをとおりかゝるむよろこひを加賀国のきぬのかけてゆき
古今集 伊勢物語
大ぬさのひくてあまたに成ぬれは思へとえこそたのまさりけれ

百首異見云 夜をこめてとは日のうちなる夜をこめて夜をうけてを云に似て明てからつきたるを未明といふか
またをいう

かゝみし
ちゝみしらぬき波おちかひて あけゆくさき旅の衣かな　一題
加賀守輔のくにへくたりけるにつかはしける
詞花 よろこひをくはへていそく旅なれは思ふこともなき道をこそゆけ
かくし　加賀守
よろこひをくはへていそく旅なれはうへてそなたへあかぬ
越へかゝりたる夜ふかくいそくあけゆけ
をいとらむる
夜をこめておもく門をひの関しけみちをまて袖にあふみ
百首異見中 晩の人を

後頼朝臣無名抄云常陸国に鹿島明神と申社の祭の日女のけさう人のあまたある時はその男の名ともを布の帯に書付て神の御前におくなるをあまたある中にそへき男の名ある帯のおのつからうらかへりたるを取て祢宜かそれを見てさもとや男の名ある帯取れはやかて出たりけるを合せて男のちきりをなさしむるを常陸帯とはいふなり
催馬楽石川
石川のこまうとに帯をとられてからきくいをする常陸帯の
帯のたなかひそえる
正下考帯古の條考あし
萬葉集に周防なる国山をとらむ日かとふの

何あぬめのこゝしまをかり衣たつねむかしを祈りかゝるかな　さよ　たけ
別の心をよめる
千載 別恋 さひい
あつまちのみちのはてなる常陸帯のかことはかりも逢見てしかな　こう　う求
常陸なる緒の くゝり佐りなき待くへてそ
つりしなる帯をむすひつけて侍る
新続古 夫木
ありもかくつれなきむすひ帯かしたのおひのうらめしのよや
かゝし　緒葉 イナシ
別るとも心ひとつをむすひとめてかたみのたかひのあらぬたえせし　なさ　せうてイ
中ころ元伴實縣郎へまかりたるに　つかはしける
夫木
雲のゐるみちしいそくみちへむ日はそてに涙かゝりなまゆる

鳴尾ハ津ノ国武庫郡なり
[illegible]ハ汐湯治なり万代集に
[illegible]
て云々

大和物語
烏玉のわかくろかみも しら川の
みつはくむまて老にけるかな

夫木
[illegible] 相模
金葉集別 後朝に[illegible]時人々馬の餞し侍り
[illegible] 師頼
[illegible]
都の[illegible] 行宗

なる尾野[illegible]あみのまつるとて人のすくふすゝ
まて別れをしみてとまる
あまたゝひ行あふさかの関[illegible]
[illegible]人の秋風[illegible]
いつかわするゝ

秋すきて[illegible]井のみつ[illegible]
あふみの[illegible]人の許へつかはしける
夫木
いそやまの[illegible]人の[illegible]
伊勢の国へまかりけるに大貳長実の
白河の[illegible]人々餞し[illegible]

[illegible]

待つらむ我が身[illegible]
[illegible]
右の哥新後拾遺に再入て少異あり

夫木鈔三十巻 後拾遺[illegible]
二条太皇太后宮肥後
[illegible]
[illegible] 後拾遺[illegible]
[illegible]
後拾遺恋二
[illegible]
[illegible]
源氏東屋
[illegible]
[illegible]袖かな

わかれ[illegible]後の[illegible]

羇旅部

旅宿イ

肥後君と修理大夫行宗といひける人中にてつねに
[illegible]津の国なる[illegible]湯あみに
まかりてかの国より彼大夫のもとに

玉葉 後頼 卒題
夫木 万代
[illegible]袖[illegible]
[illegible]
[illegible]つりする

夫木
[illegible]

伊勢物語云昔惟喬のみこと申みこおはしましけり云々いまうりまうかゝ
仲の諸の君たちの院の桜ことに面白
し云々

大和物語云亭子帝を養院におはし
しましけりとりひとつ鶴を人に
よりやせまひにけり大江の為ちかむ
浅みとりひあるまふあひぬれい
[illegible]
和名鈔云説文云艘俗云為流船著沙不
行也

かへし　肥後君

あしの屋に志をれもふさすゆりにても君にもを何におくる事
たゞ東雲伊通の君にて六首のうちよみ給ふ羇中
曉思（恋イ）といへる事をよめる

万代
いとしく旅の床に君をさぶ志さのたゞかさなみさそふなり
隆程東郡季のなさの院にて旅宿郭とといへ
る事をよめる

あとゝ見えたひのとに思ふとも志ってやうはの宮に呼ばむ
熊野に詣るによりて舟にのりてくるりけるに
こゝろひといへる所にて舟のみてくるりけるに日くれ

和名鈔云釋名云艇小而深者曰艇
今案和名太加世
世俗用高瀬舟
延喜式曰津国鳥飼牧
野口本のを君ハ招餌の義なれハ
方正しからず

二句ゑのさゝりに簑笠を立入たり
雨のあし恋の部にもあり西戎にも雨
脚とやり

志るしの杉の事神中抄九巻に詳
たつきは手書つゝ出べし

山家集　心さすまわりてあきの一家
（詣さふたるゝみの浦をかゝる風に吹
こゝろはてかくるゝ）

○散木集

ふくれハ
杉さへ（を君忘れ）なれたるせの舟をさし（ゑイ）志をてとりひにてもくらしつゝかれ
又の日船よりおりてあゆみけるに雨のふりけれハみの
うさきなるとてよめる
うちきるに身のかさりといみえしとも雨のあしといおもえさり今り
みるのゝ山をとゝめる

夫木
二輪の山杉の志をりを志へ（しイ）にてたつきも志らぬかけちをそゆく

神中
あれし以清りけるせきのかしられハかみとともにもたちかへるこのれ
筑紫へくるりけるにたゞとみといふ所にてみさこのいを

和名鈔云爾雅集註云鶚鵰 和名美佐古 鵰属也好在江邊山中亦食魚者也
二句に高富をおくせり

和訓栞云あの代松原ハ夫木集に見え万葉河内の行幸より眺望の御製を載て吾の松原とよみたるを古来あやしみたれどあのとよめり

神名式云筑前国那珂郡八幡大菩薩筥崎宮一座大
和名鈔云筑前国糟屋郡香椎加須比

とりゐを見てよめる

夫木
夕されはたちみつれはあらき磯の波をさしくるみさこたちそさり

摂津国なりける所にまかりてかへりける男の
あやしうなるを見てよめる

かくめやる所ともなきみなれて宿をあやめてたち

伊勢へまかりけるにのいたるあたりのおかに
とまりてよめる

いそのかみのとまやかた寄のかき枕ありふさみまめつとつる

つくしの松のなかをゆくにいとなんよそれる日ころ侍るに

筥崎の神主のりけと香椎の神主よりもちと波

筑前名寄云箱崎 延喜式にハ那珂郡とあり今ハ糟屋郡に属せり此地昔ハ葦津浦といふ神功皇后八幡我御誕生の時御胞衣を箱に入をさめたまひし所なるゆゑに箱崎となづく其所のしるしに栽し松をしるしの松と云俗にハ箱松といへり 香椎宮ハ神功皇后の御社也仲哀天皇此所に崩御したまへり其御棺を椎の木にかけしに異香薫したりしゆゑハ香椎といふ由なり

赤間ハ長門国豊東郡也

古今恋四 伊勢物語
ふるのあすのしかやく烟風をいたみおもはぬかたにたなひきにけり

ててよまれかなたにて互に論し戦
ひて此事いうまゝかゝむにさゝへくはさくめむや
中きいとなかくなくをむにさてうしとしゝるをすて
よめる

夫木
それ侍る此松はまへのみちにてかしこひの方につきたえさくらえす
興して出て
あるとき雨にて日ころになりにあるきてあるくを
まて四月になりけれはよめる
風をいたみあやなくたふれしてなにぬるをもりしつむ
露の色をいふるをいて身にしみてよめる

神社考云神功皇后舟過備前海上時有大牛出欲覆舟住吉明神化老翁以其角投倒之故名其処曰牛轉今云牛窓訛也

吉塵集云うしまとは泊之
牛窓虫明迫門ともに備前国邑久郡之むさけはむしあけの急語也
狭衣云舟の遥にこゑれせくる心細き声して虫明のせとにとよひとうこゑもあはれにさらに 流てもあはせありやと身をぬけて虫明のせとに待ころみむ

源平盛衰記云備前国西川尻藤戸ノ渡ニ押寄テ陳ヲ取云々浦人云瀬ハ二候月頭ニ東カ瀬ニナリ候是ヲ大根ノ渡ト申ス月尻ニ西カ瀬ニナリ候是ヲハ藤戸ノ渡ト申 當時ハ西ニ瀬ニ候」
ぬちとかはしまとも諸名所集に播磨といへるもあり吉備ノ国のうちなるべし国郡全図に備前国児島郡に藤戸郷あり是なるべし

きりのあるかめはくひよりこきいてくんかそくもなりめ法るの郷
うしまとといふ所にて人家ありて人家のしたるを
ゆゑてとゝめる
夫木 うしまとをとくくひ郷の音に郷りなみ打あけてたれかとふらむ
言塵
むさけのせとといふ所にてとゝめる
たのもしやむさけのせとをいふ郷ハ立ちなみもよりしとそ思ふ
ふちとといふ所にとゝめるむとしそこに花ひ風ふきれ
「ナシイ
とす日もたりしとてよりてまさきれはとゝめる」
定めきこそのそしきにおひ風をまつにぬちとをかけてさりぬる
かもしまをとてとゝめる

出羽弁集
それにしむあとをもれしかはまさ
うつ名ね名を注のくしかむ
和名鈔云備後国御調郡歌島宇多乃哥島を能登又豊後豊前と夫木鈔にいひ諸名所集に播磨といへりこれ非也和名鈔に備後とまそ正しき

日本紀に東髮於額をひさこそれにそと訓りてのひさこそれは彼をいへるなるべし

新千載 壽成門院
たのむさきとこそ名れ山の井乃そこのみをくみてしるよも
一本ゆる底ハ底の誤なるべし

むかし人いかゆるかもしまさきとされて此詞にしもなをのこしそむ
音の詞といふ所まて女乃うたをうたひてものこひたる
に明意河闍梨の舟に縁よむおとのしたるを聞
てよめる
夫木 うたのしまのきの下ゆハ書つれてあふにのりけ者そ聞ゆる
岸夫
高砂にて風いたしゆゑれはおきにむさとをもれ
いつるもけのさらたるをとて よゆゑイ
夫木 むさとこそ心さるそしきにとゝめるそこの心をくみてしるを
庭イ
明石の浦にとゝめりて春もすゑらなりあるしそれは
月まことによふくる夜にふくるもなく晴わたりて

後撰恋三　後蔭
いつまでと立くれつゝみよとしてこの
ふひも我か人のかりゆく
伊勢家苞云玉霰歌ハ思ひ方俗ニ思
ひやりのかひと云意と有中らをも是ハ
思ひ所のかひと云意也
新撰六帖　行家
風あらき湊のおきつるいちのまに
ちらつ小舟いさや入ぬらん

市之醋酒ニ一諸と立つれ向革も無
ふさひて名をとるべし

名寄
いちはやのなかつてらの村おもてき
みてくらし向て行く
初句夕ニ木綿をそへたる木綿も手
向ニ幣の縁
神名式日津国島下郡幣久良神社
御幣島ハ西生郡ニ在といへり考へし
続詞花　道時
しかすがりあれのはしゆ旅寝して
きひの中山いつこゆへき

雨ふりきれハ山のをちこち紅てかゝりかふれハとある
をしあきも明石の浦まてる月かけおもひもゆかしさりけり
一の浜こゝろ我く入てよるにかなとぬといふ夜のみ
まして集て須磨く人をして待るを人いふれのみ
なみてとのかうよちりられハのみましてありぬとて
とある

いちはやをとおもひわかのやまにやいちのかさけをとねてはかた人
みてゆくしあさいふ宗をもくとてはある

夫木
夕かけてみてもしなをみれハこの川よにたちけてそさす
百そ旅中に旅の心をとある

しかすがのかはの山は旅にしてよその日をさへにあめをさへかゝしけるつ
海路の心をとある

とよむ塚お思へ浦から舟のさまけに数ねよしらそ床那み
定家をとある

つとしくもわびしき夕されハ身の世をもちるいのうら風
田上に待ちたち八月なりしは風のさかきあたつまより
なかにしみてとある
さやの茅は風さつれてよしとさらにふるさるむる秋のそうきぬ

しかすかのかはり　冠辞考古
事記傳ス文学考へし
万葉集九巻十九巻あるに葦屋處女
墓の哥あり大和物語袖中抄河海鈔等ニ
詳之袖中抄にいとあつくいへり
雑上とも塚の条考へ併るべし
新羅社哥合　蓮忠
すしらかしやとめにおもせふ
きみけをよむみちつつまうろう
ねつひけいのより吹風をとつり
おまへハ住吉社の御前之新葉集ニ
住よしのおまへの沖へはあひま
うるひとるあそちし白山

堀百
夫木
堀百
袖中
一妻
堀百
夫木雑一
雲葉

大日本史曰源経信氏部卿道方第六子博識多藝妙和歌與藤原公任並称嘉保元年為太宰權帥二年赴府路宿筑前筵田驛會八月十五夜驛邸有大槻樹薮月経信命伐之通宵彈琵琶朗吟其風致如此承徳元年薨於府年八十二新後拾遺別帥にありて下りける に別をしむとて津守国基ゟ六年にて君は為ぬさむとてつりける返事に

大納言経信

こゝ[illegible]

[illegible]

散木弃謌集 巻第六

悲歎部

帥大納言けくしにてかへる事を聞いたれば夏姫とのふたりしてあさ夕しさにかゝる事は世のつゝの事をかしかしおもひすくさむまてこれは旅の事をもの[illegible]

ろしさもそひ人のゝもかゝりけるやうにて[illegible]

もたいらかにのゝりつゝむ事もありしかりぬつき

やうにおなしえてかけきるゝかとよおのつゝ海の[illegible]

におかえ[illegible]事をとさしにはあらしにとかきおくらん

中にさぬのをかへる海よらめる

和訓栞云をみそめ凶服に云り素服に錫紵を用る令義解に錫紵者細布即用淺墨染也とこゝえたり昌喜曰めもこもふさるとは愁に目も旁相てくゝ成をいふなるへしそれを著るにそへて墨染の袖をうけてよめり

和名鈔云唐韻云縗 和名不知古呂毛 喪服也

萬葉集六巻 帥大伴卿 宿次田温泉聞鶴喧作歌一首 湯ノ原尓云々

和名鈔云筑前国御笠郡次田次田の訓注もれたりとはスギタといひ多むを後にはる便よスイダといひしかるべし

沸かつる湯といひけるより

罔胸を焦(ヤク)に役をなさより

きみ染れ衣を袖にかきぬ事はめもこもふさるものにて有けれ

ことかきりなくて(とイ)こかくの事もきむ(ぬイ)こてあるにしめし

のやうなるものをきせられは(おかえるイ)

しめしには海にぬるぬちこゝろも[illegible]さへこゝろかたらさりけれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かなしさの海もてもはわきかつるゆしき事をあみてこそくれ

[illegible]

海をは硯のみにせられつむをやくとも(ケイ)かくこのりこの邪

玉笑零音云人之初死以七日為忌一忌而七魂散故七七四十九日而七魂氣矣
大藏一覧云中有極多七七四十九日定結生
三代実録ニ四十九日をハテノヒとよめり
源氏幻巻
君こゝろ泪はてもなさものとなつかしいかなるのはてといふらむ
後撰　六帖　大和物語
夕やミいたもみえぬとふるさといふとこしらふ[illegible]
韓非子云管仲湿明従於桓公而伐孤竹春往冬反迷惑失道管仲云老馬之智可用也乃放老馬而随之遂得道
萬葉集ニハたらちゝの母とのみよめる
字新撰万葉集ニハ足千種之祖とよ
ゆゑ後ニ至りてハたらちゝ伐親の事としてよめる歌多し今もその
事なり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

筑前名寄云三代実録ニハ那珂郡荒津とよみて博多の辺をも云るやうにこゝろやうに荒津の崎ともよめれ博多の辺よりわらと山の出崎まで云へて荒津といふるゆゑとぞと通ずれ今ハ轉して荒戸と云るなるべし荒戸ハ今早良郡ニ属せり
万葉十二巻ニ荒津之濱とよめりされハあしつゝあらつの誤也
筑前名寄云宗像郡鐘の口崎　鐘崎町の小織幡の神社ある山の小の出張と云
芦屋ハ筑前国遠賀郡也
萬盛集ニ琵琶法師の字あり

[illegible]

夫木
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

兼澄集　人にきぬをおくるとて
ぬさふくみ風と多くあらはるも
こをあみのめのたゆしにいひけ
恋上あみのめにたまらぬ風のといふ事
考保しし

夫木抄雜十八　經緯につくしにて
こゆりぬとゆくてくるとて
此筑紫舟の哥を袖中抄に催馬楽とて
引たるは非也しかの説も誤なし

門司ノ關ハ豊前ノ国企救ノ郡之

赤間ハ長門国豊東郡にあり

引島ハ長門国豊浦郡の西南にある嶋之
源平盛衰記に長門国彦島といふ所
に城を構へたり是をハ引島とも名付た
りといへり藻塩草其他諸の名所集に

吹まよふ風もこゆらぬあみのめにいへて波のうへにあらし本
あらりそれにまといふ物を嫌くをこそよめる
ワ袖にこゆひきけよ海人よ波の雨乃とこゝろせき所を
夜もすゝ心ひつけてよめる
夫木　つくし舟うらみをつみてもとるにはあしやに袖のもちらひをそみる
をしの穿ふるにせき座に人のみえさりそれによめる
ゆきふるにはをしの穿座よりこゝめぬさへそかきみたりなる
あらぬといふ所にて
夫木　夫こゝにおきふる袖はあらぬまてうみにしられぬ浪そこゝける
しくしぬといふ所のあらぬともてくるりもまくて来て

備後と云るハ非也赤間の次に次第せる
にても備後なるにまゝ出るしまて
次なるむつもくちかしも名所集に
備後にあれとこゝのつゝ赤間と室積
のうちにあれハ長門周防両国のうちなる
ゆへ国郡全圖をこゝに周防国佐波
郡の海也にあれとこゝにあらむへいこ
まゝや是ハ試よいふのみ

閑田次筆云室積ハ周防俊頼朝臣の哥
に筑紫竜山をうみ合せられしこと舟行
の順路にて竜をもてとあれハ疑なし
今案に閑田の説は非也国郡全圖をもて
に周防国熊毛郡にあつて宮洲室積と
三つ並びてみえたりされいこのかぬ
と筑紫の竜山にはあらさるし

その心もしらしてはるかこのうしもまうてきてたひ
こいふ臭をこりもて行るをみてよめる
たゝ所みのこゝろしにあらむ事にたひらかにあらぬ物と
むへといふこゝりにそ浪の本にぬてあるなれハこ
こゝろうらにや所にしみてよめる
その者も波もよかすにちしてむへこそ袖にかゝりさりそれ
くち所しこゝ所にて
くち所しのこゝりにきけハ所にしていひもやらぬ物をこそ思へ
むろつみといふ所をいてゝかゝりこゝにあらしをもてまゝ
そとてよめる

永久四年百首　顕仲

なみたてゝかくとすりいきとゆれと
かつるもそえをおきの白石
白石島ハ備中国小田郡ゆり
備中名勝考云白石島の西北の間の方の
海に数十仞の白石をひえたりこれやそ
島の名ゝ所ゆるなり和雅云備後国有
称白石所今按此島備後の島と並ぶる
に依て遠き国人ハ舟にて行きてゐるに此を
見て備後と思ふなり
物思音の泣進をとゝ舟の漕ぎをと
かきなり
ともハ備後国沼隈郡之

むろつみやかなとをゐる舟ゆれハ物をおもひ(ふイ)にこゝろれてそ(こ)(申けイ)
しらいしの事をもくらとそよめる
(夫木)
こゝろしれおきのしらいししらもしる物ゆへ(舟イ)の所きこゝろをと
こもといふ所に泊りけるをまして目たらしさりぬつゝむ
泊あらいもきさもやれといへども舟こもみれこゝ舟りにけれ
いくらいをむこそこゝ舟りてよめる
舟ともいこもまとゐれとまひ人乃なけくんいもきぬるものを
ふいうまこちぬくとそこゝ舟といふ所にこゝ舟りてくる
(ゐイ)
まふいこちいようりしものを所とゆひてそれさへことを
うひるんちしてよめる

万葉集に事痛言痛かとをこちたみ
とよめり来し間に児島をそくてより
児島ハ備前国之
みやまりしもきふいも名所集に播
磨といへり

国郡全図を按ふに播磨国飾東郡に
キバといふ地名こゝろくさふいハ是也や
大庭を大場ともいへハ木庭木場同し
かゝへしされと飾東郡のキバを室と
高砂の間なれいこの次第にかゝ
ゆ考へし

和名鈔云文選注云槳保波之良帆柱也
又云帆檣以長木為之所以掛船也

おもへともこちたき旅の浪ゆ所をしめこし舟ハなけきやハせし
みやまし(ま)といふ所にこゝ舟(死イ)りて船人山にまゐりて本
こ祇なといひけるを中にてよめる
ゐてもこやましるをそさそふさなけきこゝろふ(ミイ)ハ所まくしふ也
きふいといふ泊まて雨のふりけるにちうき程によきと舟
まあらいもきさもやといひけるをきてもきけれハよめる
をやみをね浪の雨ハかくまともきふいと舟らぬ物ふてかりける
ゆよををいてゝまうるにおひ風立てそしるによめる
おふ(ほイ)舟のみにあけて物をしふにはそしらしそ袖ハぬれける
そしりけるに風申ふそりしイてかそしらをれ所として

鐘響云々是ハ本末の二あり事本
父今の通用門称の如くそれより入口
付たるを云て偏枝のまじりハべき
と約りたけのものゝ事なり云々
云々又猶衣の門ゟ初てたゝく比
めるとゝあをたゝくとゝそこと
門戸のうゝゟ駈ゐ入口ゟひた
るをゝ云ゟ人の偏入ゟ通ひ口を本
戸といふ脇処の意語ゝ是を本
ゐてつひに今俗ゟ云矢竹ゝと云物の名
ゐるゟ如ゝ

きゝくるを見てくらゐん

むろよまゐりて日のあれ〻を六日来ありてよめる

未来
あさまゐやむろつゝきつゝ
つゝきと夫

舟よりおりてたゝみをみくるまちくるよりくる事と

ゝそてゝきやきあゝしゝしゝるゝのありけ

まいよめる

うゝきゝとゝまゐりれあさやみよたまをみをあの神やゝそむ
ヒイ

猪を舟のみをよりけて人のおゝりくるよおみつゝ
ヲヲ　ヲヽリ

かけうゝつゝゝりくゝを見て

昌喜云々ハ舟ハ和名抄云艇ハ小船也釋
名云二人所乗也逆艇和名ハシノネ
是狭今云テニハの類大船ハ沿也名
ゲハヤフネ

後拾遺恋四
大和宣旨
恋ゝゝをゝいもあをゝうゝサケのみの
うゝゝゝゝゝゝゝゝ
万葉集ゝ現心をゝうゝゝゝとゝゝ

異名抄云陳旋草ゝゝゝを凪の名
と思ゝゝハ誤元真集ゝゝのあゝゝゝ
をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝゝ音訓皆の数ゝゝゝハ餘
波ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
散木集云ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ら波の云ゝ言書ゝゝ奇ゝゝて波の
名ゝゝゝゝゝ

元真集
いせのあのあまのつゝ舟そゝ風ゝ
おゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ

舟いおく波も油ゝゝゝゝゝゝゝゝ
小夜ふけて郭ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふのせゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
むろよい日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

又の日高砂ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

高砂社記云名松ハ大さ五尋ありて
雌雄の二幹しけりとり

かりやハ仮屋之続古事談ニ他の中嶋
かりやをしてとあり哥にもそれ
かりやなるのかりやなどよめり

かくさめ名ゝるよかよさこゆる松ハいつまでとたつるなれハ
かれて久しくかりぬといふをやとて

高砂の松ハおくれてたつなみのうつるをしきそ我身なりける
風たちてありしのうらに日ころに来て浪のまゝにえ
もつくしとしひつけてよめる

花衣袖ハありしの浦なれやうつるなみさその河そともかき
くらりさ母よあそちの忘し母を面白とせ寒ゑる所
かりかゝる浪にみむこそおいし母したりそるよりこ
に穿為塗かりやかとつくりて此母にけなとしたふ
二三日さりあそそせた母ひし事かとしひおて袖の

伊勢物語　古今集
名にしおいさきとりむみやことり
我そ今人ハありやかしやと
桃洞遺筆附録都鳥条云本州一所にハ
なる方言ゞかモメと云るのあり云々形状
まことにかゝるもめに似れたれ都名所
るまゝ録れし
都名の事ハ古今集ハ世物語の注ともに
詳にこそ考へ十六夜日記残月抄にもい
つるを考へ保せし
法前演律国之諸哥にもとゝあつ
おなしふるゝ宗舟のことゝあり
言塵集云かこゝろとハ風の後なれ波
なりそくこゝろと云
なこゝろの事上に注せり

志川く初母ゝ母ゝにとめる
しひきやそ母みしよりのあけかのまそ母の明んの袖みそしきを
も母の罪といふ所にて手をのかをやとてよめる
日くらしハも母のそしかゝ火立のかゝる雲も所をさふ手をなかくこ
わらのみさきにて老をのあなたこそ見れハよめる
夫木
名にしおいしをしかしの都とりしつくしのうらにそこ
おまへといふ所にて風吹所むすなこゝろとりをのうろ
といひきるくをやとてその神にみてくらたてまつりとて
かき川けなるかイ
さのみやハ人の所をきをしらしのたつハおなしのきさとそそ

和名鈔云摂津国嶋部郡生田以久多

嶋尾摂津国武庫郡にあり属邑八村
あり
拾玉集二
我こそはかくとしらるひとつ松
くもおしくも又たのもしなし
津国名所図繪云むり　加島
鍛冶千軒とて加嶋一村悉く
鍛冶戸数り今僅に一二軒のみ
あり
和名鈔云楊氏漢語抄云遊行女兒
字加礼文
云阿曽比
おもひ眼

あかしをすぎていくたの松をすぎとして
夫木
志賀のやとをしひ明石の海をかていくたの松をらふにこそこれ
なるを就ぎてたてりなるふ松のこえ名れにしめる
「ナミイ」
うらやまなるをにてる松ばらは夕ゆふけぬ月もあかし浦を
かし島をすぎてふあそひこもものあまをまりて来て
そこにひ名れもかるおりひをかりふりてのみれい
えあそそぬよしばとかていさらこのばと俗して
つりしらり名れいましくるまりてきこえ
かりりかれいよめる
かし島にあそひしにやとつきぬ月をもひかけぬを

江口にて志賀といふあそひのむすめ先とらをすして
志賀ノ又をさすおきことのなれはあれはをたとかけ
神にあ御物としてたるふおりてこよひいとゝめは
と毎りけるかれと松をりふしあしそへつ
かりしなる浦よりめる
とゝめよと志賀にいつともなく
みし島とといふにあけ名のは蓑のうへはあやしき
江天
あをそしらふて夫あをき牛をしてさけしりなるを名て
よめる
夫木
蓑のうへをさすがとみしはあちきなく牛のふしあふすれぬるを

大和物語云事そのみと川しりよ
おりしよりしてうりうりなるをとて
いつものをうりうりよつりしらは
しいなりてさつ云ゝ
京自雲白女大江玉淵女云ゝ遊女也
住摂津江口邊
摂集抄云江口橋本にといふ遊女をそ
みな見ゆられいにゝ

萬葉集十二卷
渡入之葦別小舟障多見吾念公乎
不相頃者鴨
四句あしけれてるふてさり多し
といふ云ゝ
三島江摂津国島上郡といつり国郡
全図に島下郡に三島郷あり

源氏蓬生巻云をとゝなしちにもさすり
小舟をりて渡りしかりてうつふ
しくるふ
三十帖云ゝ
をとゝなして目つきの
をとゝなして俗言にをとゝとして
と云云ゝ

津国名所図會云大河尻ハ淀川の汀中村といふ

つれてのものとハ綱手ひく夫人和名鈔云唐韻云牽紋訓豆奈天挽船縄也

さかハ時節をいへり恋上巻あふへきしかもおきとなりといへる哥考併せし

天の川ハ河内国交野郡也

この所にすらしといふ所なゆるハ其きゆるを人の君ハ
まハ新人のすらハ人なりのかたにおむもへるといふを其
後のみおかゝりしりのかたにおもはよりもすらへハ世にしと云ふ
まてといふ所をしハしと句りてつれてのものとも
かゆくハせをるまきしの事をもよめ人をあるさきて
みまハよりゆる
おもいきやうゝりしさかをきらしさて今ゆて人まえむぬとハ
あゆの河といふ所をしむりしあそもせ結ひし事の忘
いそられてよ然る
忘しさにあハれ昔のおもかけをあまの川せにやとしてそうる

土左日記云土日山さきの橋云云
山崎ハ山城国乙訓郡之
催馬樂　難波海
あんそのはあんはのはこさきてのゆる
をしつて天舟つくし川なてにへりをとし
のみれ山さきなてに

辨官補任云　永長二年　丑丁
左大辨従三位藤季仲
右大辨正四位下源基綱

続後拾遺　太政大臣
いかれハおもしその世のうらみにも
うらりし時をしひいつらむ
山城名勝志云乙訓郡水落　今云水
無瀬

山さき近く所りてそのしひかたの海といふさいはし
をうらひてのかりせ結ひし事此忘れてよめる
人されぬ浪そくるゝ夏をこしのかまといひしかりと云へハ
山さきの山里にて左大辨夏ゆりあひてそのをりの
事とおくしとひ所としてくれのうにおかれたりける
琵琶所とおしのこひて笛のをこ所る姫えのこひて
おさをるついてる
くれのへしいこと此ともにあらハうゝりし姫をこハ夏しぬと
水おちといふ所をしくとてよめる
きしうるをしひおれハあおちをひるめの外此ぬとやハみ

続紀聖武天皇紀曰天平十九年五月庚辰此日太上天皇詔曰昔日五日之節當用菖蒲為縵比来已停此事殊今而後非菖蒲縵者勿入宮中

山城名勝志云淀大橋東北有御牧八村是美豆野ノ里ナリ

後拾遺　　和泉式部

ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くくるとは

古今集　　峯雄

ちはやぶる神の斎垣もあるものをうらみもあへず散る紅葉かな

淀のわたりにて車よりのりて日暮の舟よ

夫木

ほととぎす淀の川舟いそげばや

月ありあけの空

ほととぎす淀の川舟いそげばや

ふりてたちまつ

ほととぎす淀の川舟いそげばや

なのめの夢をさまさせつらん

ほととぎす淀の川舟いそげばや

かきつばた

ほととぎす淀の川舟いそげばや

たちうき船よりうしと聞くらん

ほととぎす淀の川舟いそげばや

抜冊子云かりそめさしくる風のいとく吹て横さまなる雪と吹かくるをこれかりそめの御みゆきなり

中右記云寛治八年十月二日行向帥大納言許一条京極宅指笏拍西京岡六條南壬生西故経信卿三条と三所小在しめき

山城名勝志云葛野郡赤坂神護寺縁起云四至南限赤坂東峰菖蒲谷並高光寺北峰〇土人云平岡八幡宮鳥居前ノ谷也俗云長刀坂

紅涙ニ

拾遺哀傷
心にもあらぬうき世にもとみそめの
衣のそでのぬるゝ日を好き
藤袴巻云此服も此月にぬるゝ色なれ
河海抄云阿原に出て解除とる
まゝ除服ハ祓のまゝ

人のもとよりいつしかいたりや所を浪の勢にはたち
よ(ちイ)をうし所と人つてにいたをてイ侍れはいつかりしかる
浪ことにや陳をとめ(ゑイ)ゆ(ゑイ)墨染のころもかさり寸ぬるし 後鍵
服ぬき侍りける日よめる
続古今
みそきしてこゝろもとこそ思ひしか浪をさへもかりしつゝかれ
万代
むかしのあゆうへにおかれ(ゆイ)たりし時人のもとより
おくりて侍(ゑイ)
おとせぬにおかつゝ所さはかりもれぬ衣をこそはこゝろへかりけれ
うへし
思ひおもふこゝろにんのくてこれはこゝろへさへもうしめしきう邦

山家集下
松風はいつもときはに所にしめと
つきてさひしきをくれの志

拾遺愚草中
身をしれば人をも世をも恨みて
くちなし神のいくりを見き

漢書文帝七年紀曰今乃幸呂天年
得復供養于高廟
諺草云供養礼記月令に出陳註供養
膳服之具也今俗に先祖を祭り佛に供
る事ゆとを專供養と心うるは當れ
日本紀にハイタハリヤシナフと訓り

又人の許より
風の寒もいかやよそのあはれにふきそしきうる秋(よそイ)のゆふくれ
をし
とはれていうましきたひの浪さへくちにし袖(をイくれイ)にかかるそふかれ
おなし比月のあかりける夜人のもとより
山のまゝうへろひうる月こそもなけるやさらに袖(のイ)にひつゝ年
をし
おもへこそ知とり所なく月をこそおきふる袖のなれ(れイ)るもうしきを
いみの後に結縁經修書しけるに四巻にあたりたりけ
るに所つゝきて表紙に腹所る男のなきたる(そこイ)を書

あしての事北辺随筆松落葉部とふ
こゝろ草手の笑ふや又はあしら
ひよとゆゑ事ふや考へし
新古今　伊勢物語
我世をはかなしあまりてあつかひの
洞のさきといつれたりなむ
おもひ是は惘然之後撰集に我も洞
ふかわりをはなしとよめり

神中抄云今考能因神元儀云肥前国
ちの島此ゆゑにひらこのさきと云所
あり其所に夜とれば死たる人あるは
まて父子相見ると云々後拾我日本の
名所にも詠るは日本にはあるなと存
此考万葉第十六自肥前国松浦縣美弥
良久崎発舶云々此国と云々は一定能
因ひらこと云たれと後拾みらくと
よみたるは違はて如此の事慥考本文可詠
也不然は僻事出来也
傭字例に是楽の考あり
和訓栞云みらけは御影の事之
玉葉集雜四端書　大納言経信　みま
うして後年のくれによみ給ふ

てあ戸のむらひたるに鐘の（姉イ）文字（ナシイ）よりも知りをさし
せて（けイ）尼の頂にかけたるかたちにあしてにてかゝる
夫こゝろ源のさきにおもひしまてふりさけ（死イ）ふ（我イ）ハさしゆや
清家みなりぬと申て永賓（ホイ）ゆりつかしゝる
あらふさしもとにたにもぬれしかはいとゝや油のしたてぬらむ
尼上うそゝなひてのち（こくイ）みらくのしゆ此事をしひか
てよめる
神中（こく）みらくの（孫イ）まゝ日のとゝの志なれはそゝもみけにあはしをのを
年こゝんは（ナシイ）なれはよめるイ
玉葉　あらぬ世（よイ）にふるみちしてうれしきは（ホイ）まゝ年をさへてこそ川をかれ

神中抄云たらしひめは大たらしめ之八幡
三所の中に大たらしやとは神功皇后之
三代実録十七巻大帯日姫とあるを
おかたらしめとはよみしまや

袋冊子云仁和寺一品宮思子参詣天王
寺之時御共人令参住吉詠和歌後頼
君哥云いくゝ云々故将作當座三難
云一ツは神代ノ可侍ト云々後頼無左
右答予案之共以有理有興

新古今神祇
住吉のうなね松のうへにかけてつけは
波のさしてもふりけぬまてかさ
夜やさむきにやうしきかたきの
住あひのあよりをやおくしむ
壬二集
おさしちとのかたきむなしくは
りあひのひなの事と清かむ

神祇部イ
郁芳門院の根合に人にかはりてよめる
神中　いつよりのちかひ（と）ハ君の代をおもひたらしめにまゝせてみる
一ツ文の天ゝまるに毎ゆらせ給ひて（日来金）以念仏せさを給ひたるに
此後のくゝ住吉にまゐりて（イ）此社にて「ナシ金」そつかうまゐりて（よみ）ゆるに（よめる金イ）
金葉　いくゝ（のイ）ゆるむ（ナシ）ちみよしの松も神代のものとこゝにきけ
山里の濱子（のイ）給に下ゝ乃ゆるかさゝるにもみよし
此ゝ書こゝろ所をよめる
新続古　もみの（よしイ）江に神さむにそる松なれは波も志川えにゆふかけてこゝ
百首歌中に霜をよめる

千木片挟の弟綺語抄童蒙抄俊頼口傳奥儀抄袋冊子袖中抄記傳山彦冊子等ふ之えゆり考へし

袖中抄云此哥ハ万葉の哥ふあれいそむ帰らまてかきりみたる心をとりて別ふし妹ハ今更ふいとかすむとおもへとらふ別たる事を悔る之
万葉二十庭中のあすはの神ふらしえさしあれいそむかりかえてさ
袖中抄云伊勢神宮ふむ田男せぬ女ハ榊をそりふいおろさて男したる女いおろさとみむヤすされいあすをゆむとらすれハ男せさらぬしらハ榊をもをまふおりめしおもをとくやめらん之
元亨釈書役小角傳ふ葛城一言主神の事をえてり
書紀通證云小説云役小角云こ此本三齊略記所説秦始皇之故事載在廣博物志一言主神岂見役使之鬼乎俗説之惑人吁亦甚哉
神名式云摂津国豊嶋郡垂水神社
名神大月次新嘗
俊秘抄云越中国鶏坂明神祭の日榊ふて女の男しら数ふ随て打之女祢宜ふ尻を任せふせり祢宜さもさと持て数をとらふ多くらい恥之乃しさふサをいハ忽ふ鼻血あえて恥かりしき事ぬある也

新後拾 堀百 類題冬
住吉のちとせの松もおしなへてしもまよりに見えし

悔離別（別離イ）

別といつまをとゝめる

神中 類題
夫木 いかさまに恨やいはむさしもそのあふせまうしさすとも（袖 袖イ）

遇（過イ）まをとゝめしそといつまをとゝめる

神中 いかにしてをしへはるしそめのうちに榊をも成ておもはしきものを（おさイ）

恋のみをとゝめる

身をそつきとやらしもそねて我恋やかつてき山の岩のうけくし

夫木 たゝみの神のやしろをみてとゝめる
たのむ人のうらやらみし浪をうらみのあけの玉うき

夫木 土大夫実の涛して恋の心を

神名式云越中国婦負郡鵜坂神社
三句さえはとかハこゝふて神ニ酒ふ為ニ
とも云や万葉集ニ巻ニ
哭澤之神社尓三輪須恵雖禱祈我
王者高日所知奴
空物語藤原巻云色好る娘とも為
好みていろいハ好色の我とも狸
言ふつアダ之
拾遺集 伊勢物語
いつしもてつくまの祭とくやせられむ
つれなき人の鍋の数ふらむ
俊秘抄云近江国筑摩明神の御誓ふて女男しら数ふ従ひて土鍋を祭の日奉る之男あまたしたる女ハ見苦しりてすこし奉れハ病してあかれつひふ数の如く奉て祈てこそおかりそり
拾芥抄云閑院二条南西洞院西一町冬嗣大臣家公閑院冰石公季公傳領之

夫木 雑和 色葉 後和
いろをむらさきのをりにうつろはぬ身をのこそれは我身を（たれイ）
いろはる人のまとしきこゝろさしへの身のうすき
みもかうきあしくこそおもへなりしこゝ人のいひけ
ことをすて
いかにせむつゝみの神もうつゝなてつみなむか人の数のならぬ身を
別当実行の家にて陽家と云事をよめる

類題
おくやまをいりなかのみな袖さやみかのとうしいたくむころきれ
左京大夫顕輔の家にて社桜といふ事をよめる

夫木 そのみかはなもこそかなりそ風はいかりまかくれとも

前秋実時閑院よおりしかしるは月のおかりそる

今昔物語云閑院モ此大臣基経ノ御殿ニテアリケレ𪜈踈キ人ヲハヨセタマハサリケリ親シキ人々ノ限ヲソ寄セタマヒテ閑ナル処ニ為サセ給ヒケレハ閑院トハ云ヘ
續文粹 隆兼云夫閑院者昔是東閨甲第今則上臺之離宮也云々

夜ゐりてみまゐは女房たちあまたまして月にあそ
ひそれは南おもての社(社イ)のしたにかくれて見れは女
房たちむれてこのもとは神の社(社イ)にあるなあこの社
いさおなしき(をイ)中さむとてよき男たまへとゆを
咲てとうせむとこゑをこのへていふれはおちてそれは
無りにそり又の日つかはしける
ひとりやしろもとゑ杜に来ていのりしものをよいうまそや
あへし
ゆり たれ(ナシイ)
あゆくる神もしるらむ君ゆとむれしき杜にゆきていのらむ(ハイ)
榊をたゆる

さうきは栄樹之此木の事記傳万葉考
槻落葉山彦策子晧語三樹考等にこえたり
公事根源云春日祭上申日二月と青行ける先末ノ日使ハ近衛ノ中ノ将つと心貞観元年十月九日此祭ハ始る
新呉竹集云山とよむなてハ山にひきこゝろまて
公事根源云賀茂祭四月中酉日未ノ日先上卿陣に着て六府を召て警固のよしを仰せ當日の使ハ近衛の中ノ将つとむ昔は夜の告げしよりなふ人々葵桂の髪をかくる之欽明天皇ノ御宇より此祭ハ始る
和名抄云櫟髪賓和名加美賀岐とこえたりかうかいハかみかきの音便之
永久四年百首 俊頼
いかりにもそふんのうれはすいまるしの杉のをうなしやは

永百 夫木 類題 さそイ
まうらはまふ我神のみむろとあらむれは申つけ君の祈つらなりそり
春日祭
永百 夫木 万代 類題
さきつさのまつさかきやかきつ山ゑのとよむまていたきまつる
加茂祭
永百 夫木 類題 ひつきして
つまてまうらはしき我来てこうれはいつきそ神のうきりなりそる
稲荷にあゆりたる人のまきをこひそれはつかはしそ
たうかみよかうかのさきして書つけてつかはしける
人しれはいかりの神にいのらむしるしのまきをしらしそ
君し扉のつゐまうけり
実をとはいかりの神にいのらむはしるしの杉のうれしるも祈し

甲子随筆云伊勢備後守貞弥日記云
春日亭〔風呂成と云事〕年〳〵あり
春日亭とは伊勢守里第〔其第〕は
成をやとては汚事〳〵さらば汚代の
風俗ふくと招きて燕ふるる事を風
呂と称したる起風呂とは浴室のう
へふ湯を設たり素湯と云〔事の
さまを容易ふふふて尾張の俗ふ人
ふ酒肴を進むる時其の日暮をなみ
かるかる〔素湯と云〕趣きを
かるて浴湯をも設たる称ふて浴後ふ
一杯をすゝめ〔もの〕

和訓栞云〳〵源氏よる物を折
守る〔ふふ云り或ふ熟をとり就供ふ
のえ物の事〕〔当今年中行事ふつく
とふ餅の事ふ供所より調進すふく
旧の上ふの女て持一対を〔ふ〕神ふ供〕
て御前ふ献るその時唱ふをとる云
祢宜月〳〵ふの両の〔ふて〕〳〵
我男ふ生ふ〔ふ〕

新千載釈教　雅有

雨風もろともやのこもる
法のむろふもおもちかく

和訓栞云〳〵儒家の私ふて釈
迦の後ふ在ふ〔ふ〕ふを今浮屠家の詞を
借ふ〔ふ〕

伊勢物語云〔人〕〳〵けるまうろ
源氏鈴虫巻云我りと〔ふ〕ふ〔ふ〕
つ〔ふ〕ふ〔ふ〕ふ云〳〵

後拾遺　伊勢大輔

つるむもそ〔ふ〕〳〵
のりふあるさの風ふりせい

続拾遺　公任

今ふた君ふみ子をふのむれ
ふりそれ中一月をふふて

釋教部

来題書写

尼京大夫経供の沖ふて寺の橋と二つ本をふる

風ふけふみのこふりよ安芸
論義講し〔ふ〕ふ様ふふ座〔ふ〕ふ

たふみ法の座ふあふひて風の手人〔ふ〕ふちりと〔ふ〕一つ
結縁〔ふ〕ふ〔ふ〕ふ〔ふ〕人〔ふ〕法師ふの〔ふ〕ふ
〔ふ〕ふ〔ふ〕ふみのふ〔ふ〕水〔ふ〕ふ我身を〔ふ〕ふ〔ふ〕ふ

新後拾

大ふをふみのふ〔ふ〕ふ中月をふる
経の文を看ふ〔ふ〕ふ〔ふ〕ふふの勤求於

拾玉集四
[illegible]

法師品云當知是人則如来使如来所遣行如来事何況於大衆中廣為人説 薬王

随喜功徳品云最後第五十聞一偈随喜是人福勝彼不可為譬喻如是展轉聞其福尚無量何況於法令初聞随喜者

磯ふ五十をそへたり

後拾遺恋二 章行女

人めのみもけさこゝ山のあをつゝら
くるしき世をそゝのひつゝ[illegible]

本草和名云防己和名阿乎迦都 良

同云馬鞭草和名久末都ゝ良

拾玉集四
仏ハつひに[illegible]
のりの花をも我ゆゑとして

大法といつる事をとゝめる

たゝるめに来てえたる法[令イ]ハそふまて此所うたよりかゝむ

法師品のふをとゝめる

むらやりのみこと[かゝイ]ねハ玉つゝのふをとりよかけ[ミイ]ぬ日を[illegible]

法喜功徳品のふをとゝめる

法のうみいそつゝひきて[くイ]法の書をつゝむにさへ[まくイ]ぬるし袖ゝ邪

陀羅尼品乃こゝろを

うちいへてたのむみやまのあをつゝらくるしみ[illegible]ハわ[illegible]独うん[かイ]

授記品乃[illegible]

かこりの[illegible]ゑ[illegible]や花を[illegible]

続拾遺 選子内親王

[illegible]

人記品云常為諸佛而作長子猶如今也

拾遺愚草下

[illegible]

袋冊子 清輔

[illegible]

和漢三才圖會云雲居寺在東山花園院邊承和五年淨蔵貴所建之天治二年西山上人再興

[illegible]

人記品のふを

[illegible]

四巻経功経天品中に有開[聞ゑイ]夜[illegible]光[illegible]文を

[illegible]

大光[光イ]善照の文をとゝめる

[illegible]

人のもとより雲居寺の大仏をうみまうむにそゝせ[illegible]

[illegible]

夫木鈔　後成

川ハこれなりれ入てハ海ハ[illegible]ハ海ハかみ[illegible]き仏なりけり

無量壽經云佛告阿難無量壽仏威神光明最尊第一諸佛光明所不能及云々乃至照於一佛刹土是故無量壽佛号無量光佛云々

曇鸞法師讃阿弥陀佛偈云成佛已来歴十劫壽命方將無量法身光輪遍法界照曇旨冥故頂禮智慧光明不可量故佛又號無量光有量諸相蒙光曉是故稽首真實明

解脱光輪無限齊故佛又号無邊光蒙光觸者離有無是故稽首平等覚

光雲無礙如虚空故佛又号無礙光一切有礙蒙光澤是故頂礼難思議

清浄光明無有對故佛又号無對光遇斯光者業繫除是故稽首畢竟依

雲井にてかみ[illegible]き人のこれ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]みハ[illegible]

十二光佛乃名を人々よりまゐらせしにはなる

無量光佛

[illegible]

無[illegible]光佛

[illegible]

無[illegible]光佛

[illegible]

無對光佛

[illegible]

佛光照耀最第一故佛又号光炎王三塗黒闇蒙光啓是故頂礼大應供

道光明朗色超絶故佛又号清浄光一蒙光照罪垢除皆得解脱故頂禮

慈光遐被施安樂故佛又号歡喜光光所至處得法喜稽首頂礼大安慰

佛光能破無明闇故佛又号智慧光一切諸佛三乗衆咸共歎誉故稽首

光明一切時普照故佛又号不斷光聞光力故心不斷皆得往生故頂礼

炎王光佛

[illegible]

清浄光佛

[illegible]

親[illegible]光佛

[illegible]

智恵光佛

千載

[illegible]

一本後

不斷光佛

[illegible]

一本前

[illegible]

其光除佛莫能測故佛又号難思光十方諸佛歎住生称其功徳故稽首

神光離相不可名故佛又号無称光因光成佛光赫然諸佛所歎故頂礼

光明照耀過日月故仏号超日月光釈迦仏歎尚不尽故我稽首無等々

阿弥陀経云彼土何故名為極楽其国衆生無有衆苦但受諸楽故名極楽

池中蓮華 大如車輪

雅思光仏

一本无釈教題林亦缺

人いまさ光のきちをしるそともおもし仏やしらはしるらむ

無称光仏

たとふへきことのもみちもたえぬれいふかきも光とそ見ふ

超日月光仏

月日もうまちつけ川里にある物をみたの光をおもひこそやれ

極楽はいとのしのくるしみ乃ひくるしといふ事を

くるしみをおしとも思はいしこつ名にすれしみたの以前は

池中蓮華おほきき車の輪のとしといふ事をよめる

せれをやめくるとおもふはをくる身はなにふかる池乃えちすに

続千載集釈教 阿弥陀経常作天木のんと

晝夜六時而雨曼陀羅華

盛衆妙華供養佗方十万億佛

彼国常有種々奇妙雑色之鳥白鵠孔雀鸚鵡舎利迦陵頻伽共命之鳥是諸衆鳥晝夜六時出和雅音

極楽国土衆生生者皆是阿鞞跋致

当ふ大きいはは楽乃ちるとむるといふ事をよめる

続千 笛の音ふことのきちへのかよへるはたかひく雲は風やふくら舞

夫木

あふ曼陀羅華といふ花宮よりふるといふ事をよめる

たとふへきふるの花のひはあるのみそらやまたらかるらむ

たへかるゝ花とりてつゆふ仏はまるといふ事をよめる

きるゝ人はたまとも見しはさかしのおもものりをそ思へてきる

さかしのきあつかりて法を説といふ事をよめる

何とかしさへつるふもきあるの法をこそらむ

極楽はせるし人は皆仏の法をおこしたりしてしてん

ん心のことくはかむあるといふ事をよめる

若有善男子善女人聞説阿弥陀佛執持名号若一日云々一心不乱其人臨命終時阿弥陀佛与諸聖衆現在其前是人終時心不顛倒即得往生阿弥陀佛極楽国土

出廣長古相徧覆三千大千世界
説誠實言
万葉集八巻大口能真神之原尓零雪者甚莫零家毛不有国　此哥と六帖ハ大内の真神の原とす神ハ神の誤なるまゝなれ　大内ハ六帖のかゝ正しかるべし日本紀ハ大内陵延喜式ハ檜隈大内陵なとゝゝある即明日香の真神原なれハ亮々冊子山彦策子ハと考ふべし
木下風ハ舌をそへたり
觀經云皆見日没當起想念正坐西向諦觀於日令心堅住專想不移見日欲没彼如懸鼓既見日已開目開目皆令明了是為日想

さゝふのいとする身とハ[ハイ]からもとも志りしうきつく方をもらやんえたらもしてたのみをかくれハかなしす極楽ま生るといへる事をよめる

万代
そのゆゑ[のイ]をもの[ハ]ちりとふかくふ祥ふんのうしれもなれ仏乃出しこハ[ハ]ゑろく[ハ]もくして大宮ハかむもしうとしいつ[ヘイ]事をよめる

みそらに吹[ふ]かつ[ハ]しおかつちの身みうそらにのこ風ハ観[ハ]音を[ハ]ゆるの文十六想[ハイ]観いらむとする目を見て仏のみつ[ハ]をそふ

夫木
色くのきのしてをかさり[きゝ]ているりやみさの光[みふ]ゆるらむ

次作水想見水澄清亦令明了無分散意

瑠璃地上以黄金縄雜厠間錯以七宝界分齊分明一一宝中有五百色光

觀宝樹者一一觀之作七重行樹想一一樹高八千由旬其諸宝樹七宝華葉無不具足云々

想水者極楽国土有八池水一一池水七宝所成

水想観

思ふよりんのちりをまゝきけるの水につけてもなれぬるのれ彼國の地[ハイ]ハいるりや金をしきて各光をもなつといふことをもゆる

光さするるのこけちはいとしくこそのまさこ変[をイ]うさぬらむ

その國のうち木ハいとゝもとさをふて枝こゝる光をさすこいふ[へるイ]事を

をかしのうち木ハいとゝもとさをふて枝もとをこに光をそさす極楽の池浪の事ハ法を説[とるイ]といへる事をよめるイ

池のみれをふもむ身とハ心へともわれたら法はむつれぬるの邪

花座觀

像想觀

次當更觀無量寿佛身相光明阿難
當知無量寿仏身如百千万億夜摩
天閻浮檀金色佛身高六十万億那
由佗恒河沙由旬

次復當觀觀世音菩薩此菩薩身
長八十万億那由陀由旬

大方ぬきにて彼国へかゝる事と
おもひ給て祈人と法にとこつれは祈ふみ玉(のりのみ)はたへ祈らぬとの
つくるかゝの(けイ)あさ夕をとてまことの仏のもとをを
おしはかりまとといつる事と
おのかゝ月をかしとは祈くさ夕て仏は祈そ(もイ)ふしへたふく
河海陀仏の此身は世の中にうちてはかりうへ
うらすと以つる事とよめる
みちの身もあ夕のうそ(つイ)にはかりてよもせ(ぬイ)しとや思ひしうらむ
親者の此身は河海陀仏にまさりたる(りイ)といつる事
とよめる

從下方金光佛刹乃至上方光明王
佛刹於其中間無量塵數分身無量
寿佛分身觀世音大勢至皆悉雲集
極楽国土側塞空中坐蓮華座演説
妙法度苦衆生

見此事時當起自心生於西方極楽
世界於蓮華中結跏趺坐作蓮華合
想作蓮華開想云々見此事已名見
無量壽佛極楽世界是為普觀想

若欲至心生西方者先當觀於一丈
六像在池水上

上品上生者若有衆生願生彼国者
發三種心即便往生何等為三一者
至誠心二者深心三者廻向發願心
具三心者必生彼国

もくるとはかりそめことの志(と)ゆきをふまて誰(たふ)も人(とまうらくイ)はとりしるかは
勢至は海陀の迎へさせ給ふ人をきよくもてきぬふ
誓なりしてかれ寸なしなふといつる事(ふイ)と
人もくふんきよさはあらはれてみちのむかへはいされはなる事
極楽の蓮にはれてうらをみたてまつらむ事をいふ
かきりなてはちものぬみ(ぬれイ)とはれ祈は心ひのひらけさらめや
まことの仏は池ふなむあらはれなふといつる事をとらせる
世の中は志門むとおもいてる月此新をかうひの池ふもなはしや
三業を調へてはらるいなとし一筆といつる事をよめる
心の中にのをしへをとこのへてはもの神をみるよし　もう邪

復有三種衆生當得往生何等為三一者慈心不殺具諸戒行二者讀誦大乘方等経典三者修行六念廻向発願願生彼国

雙観経ハ雙巻経なり無量寿経上下の双巻といふ嘉祥の観経疏を初め九品往生記往生要集選擇集和漢語燈録其他諸書ハ双巻経といへり無量寿経云設我得佛国中人天乃至聞有不善名者不取正覚

設我得佛国中人天不識宿命下至不知百千億那由佗諸劫事者不取正覚

六道　地獄餓鬼畜生修羅人天

設我得佛国中人天不得神足於一念頃下至不能超過百千億那由佗諸佛国者不取正覚

桑葉抄云神境通と又ハ身如意通と云ふ故ニ心ゆくてといへり

その蓮ハ戒とともたる人ぬむまるといふ事を

法の国乃なまハの事もたもてれハあしからぬ身となる事也を

雙観経ノ文四十八願乃中ニ　その国ハさよくさとりて

いかなもあしきおりふきのことなしといへる事をとらめる

あしきなのことのゆかりハおなしこの耳のつてふもすえさりそり

その国ハまれぬる人ハむし　ことをしるさとりをえ

てそのかみのことをしるといふ事をとらめる

ゆさなしやちよの法なもあハそして六の為もまとひぬる

彼国の人ハそらをとひわたるさとりをえてよろ川の

国をみるといへる事を

後拾遺雜　増基法師

ともまれなもの山へにあくがれし心ハ身をもまかせつるかな

設我得佛光明有能限量下至不照百千億那由佗諸佛国者不取正覚

設我得佛寿命有能限量下至百千億那由佗劫者不取正覚

阿弥陀経云彼佛寿命及其人民無量無辺阿僧祇劫

大論云僧祇秦言数阿秦言無ト阿僧祇ハ梵語之無数の義也僧祇ハ数也

設我得佛国中菩薩随其志願所欲聞法自然得聞若不爾者不取正覚

設我得佛国土清浄皆悉照見十方一切無量無数不可思議諸佛世界猶如明鏡観其面像若不尓者不取正覚

あらうらんに身をハ志るこかへてゆくてまよもの国をみるこの程

阿弥陀仏の出光のあまりくてらしてゐるしの仏の

出くまをてらしといへることを

いつくにもまた月ハさやそさふいとあさひの新やそうむ

仏の出命ハそうりうへうすといへる事をとらめる

そのかとこみたの出代をハうさしまハいくそうさともいかなへむ

法とともつ他ハことえさきをとり深く知ることを事をとらめる

なかれくるのかれうさ木をとらるみハさよれのみハ春もさやそさ

かの国ハかしこのことくしてゐるしの国を照し

ゆふといへる事をとらめる

設我得佛十方無量不可思議諸佛世界其有女人聞我名字歓喜信楽発菩提心厭悪女身寿終之後復為女像者不取正覚
入佛法蔵究竟彼岸 注 彰果窮極
畢竟涅槃名為彼岸
古今集
あきらけふちはせふかゝ世なりとも
思ひそめてし人はまたれし
設我得佛他方国土諸菩薩衆聞我名字不即得至不退轉者不取正覚
物名みなく山の哥 併考し

無量光佛

無邊光佛

一二ノ句ハ雲玄の神詠の意之

極楽ハ法やとうまてみかつらむとも此うつはかゝみとあらう
仏乃法名をきくとの女の身をうへて男ふなると
いつる事をとらめる
かのきしふわたらむ物ハあきらけさいりの淵や淵ふなりぬらむ
名をきくとの仏の名を退きすといつる事をとらめる
年ふれとくちきぬ乃仏のやとなきハふるとも雨のとりしとそふ
九品往生経文十二光佛
かまくらハかけてもかとをしらすつきあふけるなき光と云へは
仏のイ法光かとわもなしといつる事をとらめる
つまこめし神のやへうさしきくともみたの光乃さしきらめやハ

無礙光佛

無對光佛

奈落ハ地獄の梵語之具ハ奈落迦といふけまなくハ心なくと古今集二十巻甲斐哥ふなり

清浄光佛

五百弟子受記品云譬如有人至親友家醉酒而卧是時親友官事當行以無價宝珠繫其衣裏與之而去其人醉卧都不覚知云々
歓喜光佛
後十輪院集
うれしさも彼ゆくこふあらんとも
夜のこゝみをなかつ川なむ

きたるかもなき光といつる事をとらめる
法の舟ふえたの光やさしつらむうき世をとらせとそこもさいらそ
たくむなきむりといつる事をとらめる
きりともとなきかことふもたのむ水積なつみもたくはなられハ
光を光佛
なくかのそこなきせやそらなくかまてる光やみもけきかま
きよらな光といつる事をとらめる
まきくるなくなりの世をとやみしつむこゝ川とうへさらめや
そのこゝみの光といつる事をとらめる
うれしさの光を神ふつみてもうらなるをみるとしもうれ

○散木集

智慧光佛

不斷光佛
新勅撰
月かけハ入山のそもいらかなれ
たえぬ光ハ我をよしもう邪
季廣

難思光仏
後撰恋四
おもかるあまふハあるまとわたつ海の
そこひもしらすいるゝかう邪
友則

超日月光佛

きとりの此ありといへる事をよめる
いまとしの人もきとりの此ありしふ(ミイ)ハのそむひかりそ(モイ)さくらさりける
きえ(ナシイ)せぬ光といへる事をよめる
後の世ハまれとこ(ミイ)やこふ(ミイ)ゆよハめやたえぬ光乃ちかひおち(ハさイ)すハ
しひかりといへる事をよめる
一本缺釈教題林亦闕
そのかとこしひかりとこしハよものうみまそこひもしらぬこころ邪りそり
無称光仏といへる事をよめる
おもふまハ虎をもまとうとハさらむみるの光そさいるゝ事なる
日月の光ともあさ(れイ)るといへる事をよめる
月も日をのこかかくもまもあるゆとこうの光そさいるゝ事なる

後出阿弥陀佛偈經云世界名清淨

国界平夷易
讃阿弥陀佛偈云宝池澄静平如掌
無有山川陵谷阻

後出云但有河水流音響如説經

後出云天人入水戯

後出云若後遭末世法欲衰微時當興
建擁護行佛無欲法
無量寿経云當来之世経道滅盡我以
慈悲哀愍特留此経止住百歳
新千載釈教 万年三宝滅此経住百
年 覚空上人
立ちしかけやなかしむ万代の
後までてしまて法のともしひ

一切経の阿弥陀仏偈文かの世界ハきよ(ミイ)名のみあり
人わるす波の立ゐふあらへそやきよみ(ミイ)かせきとかけ(ミイ)ゆるめ事
その国まてハ(イ)ぐろ川ひらかにてこゝくるかなる所なし
なふこともんふかなふ山ハ此ハへる川る山ハ本来るふ所
彼国(ハイ)ハなるし河(ハイ)のみありて法をとくといへる事をよめる
わう袖ハ志をまとなるハかかれてのりをとくらむ水ふぬまそや
天人水ふいりてたゝふるといへる事をよめる
うらやましみのりの此淵よりハふれてたへにもあまれかつく所なる
まろしのみのりハ所かれ所むし所(ミイ)ふあみさの山法乃
みのこるといへるふ(キイ)をとゝめる

長妹詠草下
法のみなきえなむ後の末なりも
ことのをしへそ行のこゝろへき

禪那唱多三藏別譯龍樹菩薩讃礼
阿弥陀佛文
十二礼云在彼微妙安樂国

金色身浄如山王

威光猶如千日月

[illegible]

龍樹のイ 十二禮文

仏なことにたへにやすらうゆる國におりし身すといへる
事をとらゆる

ぬしもぬしところも所たとふへきかゝも所きさふよそるしら法
仏の法身のそこ[illegible]の山[illegible]といへる事をよめる

[illegible]

佛乃むかひ(へイ)におりし身しこゝる光ゆむ[illegible]の日[illegible]ことくに
ゆむ所なるといへる事をとらゆる

ちかひおちすむかへ(ひイ)をのへ乃あさつく日ちへに[illegible]ひかりさし身す

觀音頂戴冠中住

無比無垢廣清浄衆德皎潔如虛空

源氏物語幻巻
うき世にいきさ[illegible]
[illegible]

為諸衆生願力住
仁王経散華品云天人散天華於釈
迦牟尼佛上虛空中成紫雲蓋覆
三千大千世界

金底宝間池生華善根所成妙高座

觀音の法頂におりし身すのみな仏をおかみたてまつ
るこゝろイ事をとよめる

[illegible]

仏乃[illegible]をあはれませた身ゆゑ所むおかゝ[illegible]よりも
むろきといへる事をとよめる

うき世にいきひの所にかへるともんひろさのうち(ふイ)にいりゆむ(けイ)
[illegible]

[illegible]

むらさきのあるりも(ふイ)みえぬ所人をみちし[illegible]
もろし乃かとけの[illegible]

拾玉集六
[illegible]
十方所来諸佛子顕現神通至安樂
玉ハこハ道の発語ゆゑとたゞ道の事ハ用られたる中昔よりかくさまにいへる例多し
為衆説法無名字
和訓栞云みつのこゝろ日本紀ハ三才をよめり天地人の為之三徑とも云り門井厠の三之源氏にもこえたり
春哥ハあしみを弱ハ[illegible]とよめり
無有諸趣悪知識

かさつたちの山光あまたふつの山庶(ケイ)にさしあへり
といへる事をとゞめる
れもへたゝこそりてきます光さへさしあはせるみたの山国を
そらをかけるさとりをあらはしてかの国にさしたるとも
いへるか事を
うれしくもんの無ふにさしたるかれあまれみそらを(のイ)ゆきまして
極楽にはあしきあまき(しイ)悪さ名ゆしといへる事を
おうまくる山法のみにあらはれて(しイ)みつのみにはあしみ(きこちふイ)ふに(釈教)ゆし
かの国にはをろしのれもむきにあしきことも(死イ)ゆし
ゆふ事もともにくしてもみやるかれんかくへき人しれそまも

彼尊佛刹無悪名
第十六遠離不善願
上ゆるあしさまの事のゆかりはいふ乳併考へし
衆善無邊如海水
新続古今　後京極
この世より蓋の系にむすぶ[illegible]
西にんのひく我こゝれ
無量寿経優婆提舎願生偈
婆藪般頭菩薩造
後魏菩提留支譯
偈云観彼世界相勝過三界道究竟
如虚空廣大無邊際
宝性功徳草柔軟左右旋

極楽にはいかにも悪き事をは名にいはす(たふイ)といへる事を
あしさまのことのみまゆ(しけ)さ身をもてて名を(ふイ)たにいはれ国へゆくわや
ところつにかきまれかとりもゆきさまゆむ海のことくに
あるといへる事をとゞめる
よものあ(ふイ)たとゞる国ハんもにしへまみよりにそり
往生論偈文(イ)
かの世界(くにイ)ハ廣さあれむかかそらのことくにあるといへ
る事をとゞめる
其雨のあしとは人のふりくれと乃(さイ)なくもこえ祝(神イ)のひろさに
その国の草(ハイ)やそらにふしてそのたまふれあそふにれ

宝華千万種弥覆池流泉
雑樹異光色宝欄遍圍遶
無量宝交絡羅網遍虚空
無量香普薫

むくしみなをといへり
其の国ハ五色の七重やへの宝の池ひろうして花咲やうに
清の花をさしほさきみちて宝をよせ
一本先 そこくの宝の花もて庭のおもにしきのけるハ蓮かりけり
まくらのうへ木にかゝらんとなり
いとしく本の玉の枝のかをとめくれるあやをてさやとらむ
たえなるはみどりに朝ぼらけ
かをりさあみもとのおもかてあそふ朝風にふくやちよの本
清のかうをしくきあれめく出づ
くらくいおかに宮をへてあめのきにつひくらぬ桑葉紅をいふ

永離心身悩受樂常無間
続拾遺雑　衣笠内大臣
まよひぬるとこしへのこゝろハ
夏の世もしらぬなりけり
如来微妙聲梵響聞十方
古今恋一
秋の田のかりほのいほのとまをあらみいろはかはらぬ
我がなかの我やまもなく
普照諸佛會
新千載秋上　肥後
うたゝねにまよへる秋のよと
おもへハ月の光なりけり
聖者龍樹造
後秦亀茲国三蔵鳩摩羅什譯
易行品云金色妙光明普流諸世界
随物増其光
易行品

心にも身にもなやみなく常に楽しみをうくるなりといへり
続千 なにしおもうとも妙なる声ハいつしかわが世のこゑなりけり
仏のみなたへなるこゑもいまをすといへり
いなつまの光のなかなるかみのおとにぞきこゆむ法をきゝつるや
あまねくよろつの仏の法をとく国をてらしまほす
よものくにゝ清らに庭のきよけきさとはそのひかりなりけり
十住毗婆沙論偈文
さく花の蓮のなかにきえひてひかりとなす
清乃よりさくるはちすの花ことに光をさしそへてきすらね
若人種善根

玉葉集　慶政上人

法の水ふさきとりをたゝとして
むすめたちの花をひらくる

易行品云見者皆歡喜

易行品云乘彼八道船

拾玉集一

つみ人ハ法のみふねのかりせハ
くるしき海をわたらぬしやハ

天台首楞嚴院源信往生要集云大
文第二依求淨土者極樂依正功德
無量百劫千劫說不能盡笇分喩分
亦非所知然群疑論明三十種益安
国鈔摽二十四樂既知称揚只在人
心今舉十樂而讃淨土猶如一毛之
滴大海一聖衆来迎樂云々

殖おきしんのたちすゑらけれむ祢ふ波をうるひにして
見るものこれよろこひをかす（ゑイ）といへるまをよめる
うましさふたへぬ波やつをりゐてわが身をうさるまとれるゝ事
かのやつ乃うちの船にのるといへり
つみ人も法のふふねふたをうりてくるしき海をわたるとうしや
往生要集十樂をよめる十首
聖衆来迎樂
めつらしくたてしちうひのまことあらはさゐてきゑせきのたえぬまふ
蓮花初開禾
あやしくもたちものうちへふせれなハ知らけぬともと（そのイ）ひそこの邦

萬葉集十一巻寄物陳思
天飛也輕乃社之齋槻幾世及將有
隱嬬其手　この哥を釋教題林集上
俊頼朝臣の哥とするハ誤なり
かりハかるの誤なるべし

新撰字鏡云馬ハ陟立反入絆也保太
之羈羈同寄宜反保太之

初句てをさへてハ手を障て之万葉集ハ
隱障倍之也とよめり六帖ハ手をさへて
よし物の戯ハせさけともとよめり
庚信ノ賦ハ長河一決不可障之以手
ミハへり

のこのひしりハ聖衆之

身相神通樂
ゆゑとふやかりのやしろに身をかしていたひし月（槻）のさゝえてそみる
五妙境界樂
志ゝハあれとしひしこまぬんこそつみふかきみのほとしなりけれ
快樂無退樂
ことゝりやさんのみちひる海にたまいりぬる水のかつるものゝハ
引摂結縁樂
てをさへてむすひとめし水の法をうましきせにかさねをうれ
聖衆倶會樂
かゝるくらかしこき法のおしりとやかしけれくもひさをましへむ

新撰字鏡云倭偯ハ倥々也須牟也久
志又伊止奈志
いとなしの考山口栞嚶々筆話等ふ
くハしくミえたり

時されくハいつもの時と定あるす
なくしわらハ水の梵語也

海篇正韻云兒祭詞又禱詞
唵阿蜜喋多帝際賀羅吽薩婆
訶 かえす了流ひてえ

延喜雜式云凡難波津頭海中立標
零若有舊標朽折者捜求云々

萬葉集十九巻 武蔵野尓宇良敞可
多也伎麻左氐尓毛乃良奴伎美我名字
良尓低尓家里
畧解云古事記ふ内ニ抜天香山之真男鹿

見佛聞法楽

めもみゝもまもるしるしのおもふらるゝ法のさきもいとはし

随心供佛楽

はちすはのあかなむしをてのかたちをそおもひつけれ

増進佛道楽

そのしものかをむこそいかにおもけのかやさうしつるむ

阿弥陀小呪

歌のそしめの字ふ阿弥陀の呪の字をおける

みちのさらにあさきこえのみをしりてたてるしるしふおもひをいみて
こよひいかるつくへふはさるてなハおりくまとなむして

之肩抜云々と有てさハ武蔵野の鹿
の肩骨を取て焼占ふなるかく云り
鹿骨を焼ハ我古への占の法なりしと奈
良之ふ至て絶しふや東国の神社の
中ふハ今も鹿占の有とえて東广呂の
ふたりし骨の占ふこそしるとえ
とて

萬葉集九巻ふ夕塩之満乃登等美
尓とよみり汐み汐の満來たるを云
なるしとりの約言々東国ふて今
たゝへと云之藻塩草よもしのとも升
しるのたへたる時を云とこえハ雲脚
抄ふしほのとも升ともえされともる
ふ升ハみの誤なるへし

枕冊子云まんたらハ枝さしなともむつ
かしけなれとこと花ともにみな家々れ
ともてはやさ花やかなる色あひふて
さしいてたるいとをかし
本草和名云龍膽和名衣也美久佐
一名尓加奈 和名抄同し

鹿せさといへる事を

武さし野はおちにしかおいされてなかなかかくやたのむこそすれ
こしのつとりよハあやしきこゝろのみかさなりてよる川
ふむさいしる身のありさまよなよなとはるかなよなとう
あさ川しほさしのさしみちくるとかされとも身をとゝへ人もなし
身のあやしさふおもひしりつれて念仏をとなふるそあれ

さそふ

身のかなのかうゝをまてよ身をかれてみつのそこへもたのまれる
ほんたしこゝろ乃かれすふのとらしるにけす

うんさうのうれしふひとりのこゝろハ秋のゝみ山霧やおくらむ

玉霰云とのうきは俗にいふせうふて何事にせよ計るのいやうる意也ここらへもきこえ古今集にこのうかうちよ覚のかくしよみかふもいやさうみさきともかきう抄声にふかくといふ事也

古今集物名　紀のめのと
いさゝめに時まつまにそ日はへぬる
心はせをは人にみえつゝ
いさゝめはかりそめと云ことなりし

列子云宋国有田父云々其室告之曰昔人有美戎菽甘枲茎芹萍子者對郷豪称之郷豪取嘗之蜇於口惨於腹衆哂之
文選嵆康与山巨源絶交書曰野人有快炙背而美芹子者欲献之至尊雖有區々之意亦已疏矣
芹つみし昔の人もまつことや こころにものはかなはさりけむ
俊頼無名抄云是は献芹の事にはあらぬ嵯峨后の芹をめしけるを朝清めする者の恋死しける物語によりてよめるなり

たのもし念仏はしれしもふんてたくましよます
ちきりしものかたきあることにあみた仏とおもふるみちとおもへしもふる
ふもたえぬ念仏はこのよしよらくしもふよす
てらたゆくをゐちらてつたわかまといさやあみさのこふえもしめや
それもやそたのみをうくるにます
いさらあまあれとみあせさるかりとみさをとるのあむ　ふそせそさは
男子のみたらふ弟なれは後世ゆらくしとなふよゐす
せうそのみしみなひのぬきいらうのちうひもたのまれぬられ
極楽のうそしふ君たちふあかりなれしてみえへさるあかは仏
小ならゝしきことのおかゆる事おしそくりてあめ

松落葉云をしるふ稲之なはかろくて云る詞にて車を小車といふか如し続後撰集に片岡の枯乃木の葉もふきひさるのそしる今やかゝましと家卿のよみ給ひしたる稲のまとこゝろなれ

羅字とある哥一首脱たるにや
無量寿経云設我得佛十方無量不可思議諸佛世界其有女人聞我名字歓喜信楽発菩提心厭悪女身寿終之後復為女像者不取正覚

せちりは刹帝利にて王種也そは須陀羅にて農人種なり慈覚の哥に我らくるしのそふへぬまは せちりもすそくしもわれさりける

いかくしとみむ人えそはあらぬめにまなきさもわれかしくさ
後の世のこともこの世のつねあはれおしをられは渡のつ
さきぬふちして
かつしめのささ田ゐせしみえされてゐさもたえしとつきぬ渡この
女乃身は深あるふ緒ゆ人はすあるなかりすして此身は
あやしをれと男のあかはかりなれはなるらくはとおもはえそ
をとめもそら緒へいそすは生るなかり上しせなそなふ頭らむ
深陀のちらいは人さしをす頼はすこそそてたのもし
さふらめる
むりつるはせのりもちことつはいえれもせしれ数するもとよ

和訓琴云々き祝詞ぶ取ふけるやの噪注ぶ古語云鏡く仮くうえそう法式ぶおきき申ふくきおふくうえみえたう今も礼つけなるとそけうと云り

あーうえぬ嵐の騒ぶやさんさぬのそぬふ同一本野まもおつつめーもーあーぬうせを活るふや神功云尋撰式ぶ女をいーけやーとひいおく後頼の髄脳ぶうえの定よそ云仏。

そーけ八愛字の義ぶてうえーむえ〈そーい助辞ど萬葉集五巻ぶ波之伎余思とあり女をいーけやーとう云説ひく事おうう此哥ぶ女の意ぶよれなる冠辞考万葉考別記記傳万葉採かと考ア

夜ハ闇ど同戎ぶ八千載集ぶやみちとあり源氏ぶみちのくとしいう記傳六巻三大考雲の真柱山彦冊子かふみの仮うえそう

世中はさえあめをふつけて。舟のうて風ゆう

そーきそーあーとめる

女をの後代世の事おそて行こうめるまあ

それ八時ど出神おひいられておうそーさよめる

神

そーけやーれそさえいれんえうの公国をのもーてそよ

かみよ八をうえ

なのもーさふうめる

千載

かみふうえ

千載 古来風体

おほえ江のもふうつもうえ

堀百 美題

思ひたうえ

千載 無名抄

あさてかすあ川色をえ

堀百 月詠

初遇恋

新古 無名

あーの森社ふりえ若

堀百 恋題

不逢恋

堀百

わ山辺ふ

鐘ぢ響云玉八称吉野かは八堅石の消わえ之石をえーてかえーくえーと云八堅岩の義ど云ゝ

萬葉集四巻

廷立麻手刈干布慕東女手忘賜名

濱臣云万葉小麻手刈干と有ど今印本小麻手刈干と誤りそのかみ草くよりそう誤り来りそあさてさハひあ八ーたうえうえあそつえて色ごの説あれとう云ゝ誤ど

長明無名抄云秀句をえーみたう詞つひいもーおくつけつれ又見ぬありあさやなすえ、あーのやの云ゝ

夫未抄

洞院摂政

ふのこえそのおひろうえむもひらけそゆるよのかうえそうえ

六帖五

あふ事のうえれさえ恋る七つみのさやふ人のうひうえれ

散木奇謌集 巻イ 第七

恋部上

百首ノイ

郭公

万葉集十二十六巻に恋之奴とよめり
恋に心の使ひなしより奴と詈て云る也
法苑珠林云為欲所使為奴畏主又
云凡夫重色日為之僕

後鳥羽院御集
ぬしなる姉のあるやのこゝろをきき
夜をくゝ妹の衣うけなり
月詣集　實国
あ月雨に姉のこゝろやのたゝるをきき
ふしところまて水は事にそり
たゝるをきの姉にて簀をかきて床と
をるをきのをるきこともよめり
新呉竹集云むやひもとゝ泊れとにて
舟ともと一つにつるゝと云又岸の松れと
につれくとも云俗にもやひといふ
夫木鈔　後鳥羽院
年ふとも志しられんあ月をかな
かなのみれのたえをこゝろも
藻塩草松葉集等に古登多加磯と
標て此哥を載たり案に事違磯
ぬるへしされはこゝろひそ
と也へきにこそ

旅恋

千載
堀百
志ゝひつる恋のやつこの旅にても身のくせなきやゆへとゝろきは
後朝のこゝろを

堀百
こゝろ淫もさそしは知ぬるむ人をさしも志ぬる人よりさ所

遇不逢恋

堀百
夫木
山ゝつのあしやまかけるたゝ(けイ)をきにふしとも志ひなるゝは

思

堀百
夫木
むやひをるか乃のそれ(をイつれ)のたえにそあなのそしふゆ(きイ)きもけ(ゝ夫)れ見

片思(恋イ)

堀百
夫木
いとみなくことゝろ後によるは人にけてうへるものとしらそや(をイ)

神中抄云このむとのみはとは或書云むと
なみとは妻といふと云りされはこのむと
なるはなにまゝにあやうりて我といふに
そとよめる也妻をこのみともいへはむと
なみといふむまゝも侍りなむ
色葉集云なにまゝにこのむとのみとは
なるもなきにとゝる也
橘翁云初句何なるにのにはとの意なるへし
万葉集に妹にこいなるの类之なみ
とは堀川百首の吳本に なみにしたか
之宜しかれは何なるをうしむとなるに
いかなる人まるあえてかく後の思ひ
まちると云意也

萬葉集十一巻
湊入之嘆別小舟障多見吾念公尓
不相頃者鴨

恨

堀百
神中
色葉
行まゝにうらむとなみ(このイ)(たのむとのみま堀)ハあやうりていとふ後乃志のふちうらむ(小堀イ)(た神)
長月乃十日あまりのかとふ女のうりつゝけるは
かつらきの神なれ身のうれしさ(きイ)はくるれは物をしひますれ
人のうりつゝけるは
あしはしたなれし小舟人さはすこうきをれとさ(ハイ)えりからこ
人のもとにあらうとうらふこうよひはうつりをとゝ
をまはいひつゝけるは
数ならぬ我身はよるのこゝろもうはさつれは人はまつうへをしらむ
かへし

女

八雲御抄云錦木ハ狩衣の様ニ云々
も誠ニハ不然由俊頼抄ニあり陸奥ニ所
為ニ云々恋する人の家ニ立置云々
錦木の事ハ奥儀抄神中抄等ニ詳ニ
堀川院百首　野　仲實
月きよみあけ行の野の露ゆゑ
さらぬ分なる衣さらぬれぬ
月詣集夫木抄ニ
よめるあり身のうらふ葉をとをしてさらす
回国雑記さ　めるやつの標注ニ云
小竹群の約たるにてさめると云此地
小竹の多しとの名ありと一説
いづくにかさらしの籠ニつつる草ぬ
ハ小竹ハわらをハ小群の義なるべし
なるのあきてきハ真苧麻剥ノ籠ノ
秋萩七たりふうとし
玉葉集雑三　定家
世中をたのむかきのしのゝ
いくよのやとあれをそ行む

後拾遺恋四　如覚
うらみじとしのびしものをなげ衣
ひとにうちきて成ぬるかな

かふさりにさらる人をやとそ衣うへをそなりに悪にとそそへむ
悪乃うらとよみけるにて
万代　夷ぐらの日つきにたそつ海木乃下くりくり取ふくるゝの礼
千載　乱しまを　をしめるあらをの浪はたつ氏もなのるにそ神しぬるに
夫木　志ぬ浦なるそのあらゆにきむしなのおそろしきなてぬるく神ぬ
夫木　みそのふりまをのあさ伏なりたりたつふつけておくるきみこの礼
夫木　堂つむ志川のこ夫ちふ志なるこるうるみまるふもこふとこうるや
金葉　神中　もれ業志けまるやとこそそれおもひのさりおふる物りり
夏の悪乃ら乃をよめる
続古　つらしともしひ物さすハ夏ころもたくひとへにやこひしからし
類題

倭名鈔云唐匈簿云細射弓箭今按
此間云和名
万万岐由美
和訓解云まき　延喜式云箭
の名ニ真纏の字ハ箭室ニ云々
らと云ものハ簿ニ象りたる左傳ニ
房ともえたり　太平記ニ平胡籙の
箙ともみえたり
春草云夫木抄ニ
歌ニ考るニ万き弓と云ハ今世用る
木竹を合たる弓の事也木竹を継き
合せたる弓ハ故継木弓とかゝり
後拾遺雑二　赤染衛門
風たちにしぬれてふふくしを
ひてのくらの河波なりけり

神中抄云みなかくるあみのたりひと水
をそくあみいりもあふとしのふとみ
とりふりのみかふとみとうふ沙
おもあふとしてのみ人とみるとうひ
なりけり
萬葉集三巻　門部王
東市之殖木乃木足左右不相久美
宇倍恋尓家利
二句ひさハいちの誤ハるべし

初中ハ乃ら人乃つるよあやしきことのをそれハうら
むるをゆそくせしとしきすとたくひ物きとゆ物れハ西多記
のやそそのえ　乱ら物ふむもひつけてつゐしをる
海乃物ら物やそそのけ物ぬることふくせしくてよをいるをり
人をもらまてをらた河といふ事をよめる
ちしおまへとうくふこひのワをられて物をくやをろき夫やかしき
厳下にて悪乃ら乃をよめる
そそともふ悪をおくく人ふこ我をるをハみをへうり今神
神中　みかくて見あみのたりひ乃かひも物く人を雲ゐのよそふみるる邦
夫木　年へてるひさのうらさをしらても人を身をかふるの礼

莊子秋水篇云寿陵餘子之学行於邯鄲与未得国能又失其故行矣直匍匐而帰耳
学歩邯鄲事班氏叙傳にも出たり

新千載恋一　俊成
年ふれと人のつれなさはかはらぬに涙のいろのうつりゆくかな

萬葉集五巻云度日之鳥且飛
文選張景陽雜詩云人生瀛海内忽若鳥過目

呉竹集云めくるとしつきのはやきを光陰の早くすくることの目前を飛ぶ鳥のことしといふなり

河社云家持集夏衣かくしふ山の時鳥　今そきこゆる声たちかへり
枕冊子に枕はくらはしの橋とあり日本紀に東大寺に近しといへり

山城名勝志云嵯峨天龍寺法界門傍有小川架土橋土人うつゝの橋といふ
よみ疑くは哥しるへの橋なり

萬葉集四巻　柿本人麻呂
三熊野之浦乃濱木綿百重成心者雖念直不相鴨

筆のすさひに云もゝゆふ一名はまゆふといふ広東新語に載る所の文珠蘭といふ

夫木
君ならて我せこそこにこへうらみねやゆうらやましくあをみせし人

夫木
みさこゐるすさきの浦やおもひ立あさしほみちてかくれゆく身の

恋しさに涙の色はかはりけりつまなきいはてかはらむとこそ年

夫木
たまくらに人をいはれとめもとりてそのそやそくもせつらめかれ

夫木　寄衣恋
から衣ぬるゝのうちやいかにやふくへいかさゝるもあへぬなみたこそ

夫木　寄題
ふみ見しとさるにつけてもうらめしきうきをしらずてゆめの袖かれ
妹みをみれなむ

みちのくのあやしきかたにうかりけり人とはむとさねかね年

保安二年内大臣家哥合判云秋をへてさや田にいなる詞いかなる田にかありし證哥にみえ侍らねは、ふる身をおきてうきへにたつ古くはみたるゝ心と見侍るを、詞いやしくてよろしからぬ秋をへてとよめるいかなる事にかやさしといふにいかなる田をいかなるみたれを見よとあるたのまへまたしからよしある哥ともえ侍らす

新拾遺恋一　法印定為
谷かけやいはとをつたふ水のわきかへりてもしる人そなき

雅言集覧云そしとはかなきのなし云々
新撰六帖くるしからはあさしとはいふ
拾遺集にかそしとの流しとは本かとて好忠の哥とえ枕冊子にかそしとの是をしもえう

万代
殿下にてつひの和歌
あきへてさかやふたつのそのそこの袖とふもあをうらみけるかれ

続後拾　寄題
万代
恋催舊衣といへる事をよみ侍りける
そのかみいもとさし寸川水のうきうてもめみにかはりき
古ひの恋よみ侍りけるに

夫木
月つきていひとめもうらめしきあさなにのこゝろさしあらはれてかなしむ
あるへのとゝるなをしあはれとあはしつらくてうらやむ
つれなさのはかなくもたつそとことをすへて袖にかはしるうつ
すとてしょう

いそしのもとおりけのこゝろのうらみそあいねにそつる袖ゆやかしる

六帖
なるとより出てやらるるつ塩の
ひるまはかりとみえにけりしき
万葉集十五巻に鳴門の字頭之保と
よめるを後にはなるとよまれ
内大臣家歌合基俊判云なるとの浦にと
いふことよみけむふるきれいに似ぬ
ことなるを なるとのまはいらにかきそ字
ものなるとのうち
山彦冊子云あさりは上漁の約なり

古今集誹諧歌
句にとして身のつらにあひなむ
年の思ひも年もやさしき
基俊集下
家つとふるのみれれそさてなむ
山のさりむ年もやさしく
万葉集及竹採源氏物の物語にやさ
しと云るは恥しき事の也其ぞより
本義にいふへき上にも下にも優艶の
義によみなせる二轉也

秦これけは晋吾
敷下にてなひろんとらめる
日ふれは思ひもあへぬ我恋やなるとの浦よりとらしらぬおもと
これけ秦
人にをいけるひ

夫木
類題
敷下にて
年はまれらの浦にあさりをあさるのみや人あるらむ

恋
遠しきのみいらかきゆむ年のおもひむ年もやさしく
待人といへる年と

永百
いつれかくるみの浪に来待たよ波のまへ月そ見る
人のまくらたひくやせてくらもかきいなる年
そをしなとみねらむしいひする人の恋年にしる

小式部内侍らすきみもとすとよ
めるにはしく踏に文書をとらめり
六帖五 家集 伊勢
みなせのかよふそりとふくせにて
よしすしよそてみそやさく
八雲御抄云いみむやの関出羽むやくの
関日名也
阿波国に撫陽と云所あり小侍従集月
詣集等にむやのせきをよめる歌
ありむやの関も同所なるへし
山城名勝志云水飲嶺在雲母坂上
雲母坂在叡山西坂也

後拾遺旅 題綱
ゆきらしとそなのしられちの
みつくしまあけそとれ
和名鈔云筑前国太宰府並国府
在御笠郡
同書曰下座郡三城 美都本

夫木不見書恋
永百
いさやまたゆめみもまてすとしもわれにこそその椿のらしろめさふ
遠さかるとへてれたる恋といへる年を

永百
天木
いくせやみなそいかむやの関ともよ面るる人に稀なれまるらむ

且見恋

永百 類題
夫木
こえの山その大たけはかれを越るのみなされてをるらふ

隔月恋

永百 類題
夫木
かきたえてこつまに来ぬらんやさいへつくしのうしそ見るらむ
みつきとはふいつくしのふみかよそかり

隔年恋
経夫
永百 類題
夫木
年こえねそのみなるし恋れめなのみそらは見らしとらむ

六帖
我恋ハ山にかゝるたゝ所もり
つゝりにたゝしあふよしもなし
たゝつゝりハ救荒本草ニ山茶科と
あるものなるへし俗ニすやうぬといへり
即令法の音也
たゝつゝりのこと答問雜稿ニ出ツ

なくさむハ令和の意にて物思をなき
らし慰労するを云り

新撰六帖　信定
そらなるたゝ毎につくるあゐ畠
いつあれかちのこそめでむとハ
六帖
あひやはぬ人をみつゝ病なる
なかふかあり毎のゆへもひくさ
乞忌ニハ出酒をそくらゆゑ
しハ可畏きことにもいなしくしく
よりらぬまゝまいへり

永百
笛井のあれまつらいしてまをもこゑとつゝさのふしはせよとや
類題
志のひとる恋

永百
夫木
おく山乃ゆきさへれ物をたゝつゝをり志れぬ恋ハ
まとふ百
やまふ夫
しろイ
恋イ
そしめたる人のもとへつゝりしをる

そふつ法にあらそひ山つゝらいはそなくさむことしれをれハ
うたかはしといふ人のもとへつゝりしをる

ふとよ（ホイ）ともつゝからしたり毎なる志の毎の市に人ハ西とも
都芳門院の根合に恋のふをよめる

恋傳て祿とのみ物けハあり毎なるいてやしけの神乃しをれや
（そイ）（のゆをけイ）

和名鈔云本草云接骨木　和名美夜
曽丹集　都古木
みやつこさおゝるかきりそたゝてハ
ふかれみくりにもえさたりをる
続千載集　蓮生
今さらにつゝるとなふそつゝむ
我こそさきにもなハいてしか

人のことにふ毎りて後いかなる事かをさむ送て待をる
おとなし乃湖といふ（いかなやイ）なかれ毎しふ西姫からぬ法らなりせは
このへし

いたゝる湖のうへハこゝろ（まイ）ともこゝろきかちむかとハたえせし
かゝらひをる人のこと人にあやしとやてうらみ待りをれハ
あれハむしよりいひそめこれハ物をやとて
たゝそ（それイ）ハめくむかきものみやつこさ我こそさきにそひ初しう
人のことにまかりたりをるにおまへにいとふ（まイ）さうて
えおりをとやしかりをれハいひつゝりしをる
（やそくよみてイ）

夫木雜二同八
終夜たゝりて（まイ）おつる（つを夫雜二）後こうれこや毎ちかゝ山川（の下夫）のうち

清輔集 四位の侍荷前使に当まかりあはなにはのかたにまかりてなにはのもりにて我をこそ
慈鎮
奈良にてよしさはるうた大和路
をちかへり持夫にて持人足のまかる
〔一正位物語にいへる名のもちこそいへ今の欲をこそ
ふや

作杜の木今葉名蹟考杜の落葉かふえそち尾張風土記に柞曽山あり
千載恋一
常陸
いふをむ名の山のもみち
しるをふものまそこと

いそなそたそなと　女イ
堀河院の御時中宮の方にて殿上の人々歌つかうまつりけるに山川のあ
そそふ今そ
そそふ物を
球そこれ
こイ
かなひそまそのつそそかそまそえぬそそをむ
十月そそ
人の神そその杜めやそそふ多かりけや

○散木集

雖契不来

いそなそそ人のふそふものそ身そそふ
かそそふ人のそそ
そそつそそ

続詞
色ふ者そそめそ衣いつそりてやめひそめむ
中納言国信の家にて遠イ字会しけるによめる
初恋
風ふけたちくやとのいそそれよそりれ志ふ
後朝のこと
歌合會恋
契そそそそそ角田河かそ多のふ

詞花恋上　親隆
風ふけはをしかのなかりかくよりは
ぬひくと人のふしかれ
源宰相中将家歌合
十四番　左勝
よとともにむちるとこのまつ身つる
波のよるいそにふきてそれまた松
まつもいてこひありつる
右　基俊
夫木鈔　為家
しらせてもいふ物なのなるへ木
しとゝ波に袖をなるへて
同　鎌倉右大臣
沖つ波うちかのなるの濱久木
をれてのみや年のへゆらむ
古今集打聞云下の帯ハ装束の下に
着たるものゝ紐をいふ古帯と紐と
かよはしていへり
萬葉集三巻　笠朝臣金村
鹽津山打越去者我乗有馬曽爪突
家恋良霜
畧解云家人の恋れハ馬のつまつくと
いふ諺の有しなるし

遇不會恋　逢イ

恋しさにたえきなうるゝ油の物なきを人のこゝろともかれ

夜恋

金葉　类題
よとともにたゝなる床のまつ松をせまや人にとゝ金のそしきを
古来風体

経年恋

新古　こひしさに哥合
恋こふとなるみの淵はなる恋人をこふといふ年を
类題

殿下にて日続人をこふといふ年を

夫木
恋しさの帯はいひなといせといさもあ（ゆきもこそ夫）ゆすこしかりなる我にくせかれ

人恋我

类題
くちぬらむ袖そゆしきわかこゝろのつゝ浮くこひに身をしくるけハ

おもてふせハ面目を失ふ事をおもたゝしの反覆之
和名鈔云切韻云泛子　漢語抄云宇久　釣ノ別名也
風雅雜下　崇徳院
我ゆたるをにいとむいせのあまの
つりのうけひく人しかれハ

後撰　後拾遺　兼盛集
なにはかたけのあしのおひかせ
うらみてそふる人のみを
上にもこと同一端詞ありて女と
絶者の哥あるこれも女のもとふ
ての事ふや

この中なる人はもとにつきまれなりて身のうらみ
そらにこひしかしとゆてあいせきりそれハつりし　なる

続千　夫木
たゝき木ハおもてふせやと思へるやちつくまにかくれゆくらむ

人のうりつりし　なる

大かたハ思ひたえなむいせのあまの釣のうけ川ましかなれ
人のもとに身ありてきぬへるそにてふしてかへるとてゆかけ　なる

無きてつる夜の羽のうたれハうらみてそふる人のこゝろ
人のこゝろにまかりこゝろにこゝろにかへりしのとゆ
そまハとゆる

俺人ハ風のしたなかくとなれやよしくれとかへりのみをる

万葉集ニ徘徊とたちやすらふとあり
徘徊ハ彷徨也とも不進貌とも注せり

袋冊子云こゝのうみとおつる泪ハ如り
ふそり恋しき人も有しと云ふ故公
實卿云ミツノウミノの字ハオフロシク才
ケルモノカナ後世ハ難置字ヲト云ヽ
濱臣云しかハ時節とへるにてそれを
汐ぶせてより田とかる時節とかりしか
月の出る時を出しかゝ云ふ同し
檀下枝云此やすらハ正しく用語にて
たらぬ君にやむと云ふ所ハやむと云詞の
ゑ延てなすと云ふ
とりハ鳥狩也つるハ弓絃也つる弓
束之万葉十四巻に由都可とあり

人を忍ぶるふうへまといハせてあひ待つさり事れ是
よもすがらたちあしてかへりにそれハあれよりいとかし
くいうしおひえしといひたりそれハつかりしなる
そへて袂ハ裏にそなゆれてたちやすらひしよりのそしきと
ある所しき事かといへる人のかりつかりしなる
たちかゝるさゝあをとしてかりかもつひにハ沢にとこそさけ
まつる大夫公實れ家にて恋の心を
水のうみとおつる涙ハ成ふりあしきしかもかきとさくより
恋乃心をとらゆる
こうりしさ川をのゆつる打こえてあらぬ恋にやなふ法かれ

よもハ得も之俗によもやと云ふ同し　虚
詞考ふ与毛ハ能も之と云ふハ誤也
おもひハ椀之万葉集ふ片埦大膳式ふ片埦
十二ふとあり冬部身をつかいの哥の注
考へし下にもうきかゝ人をおもひ出
るふとよかり

敵下にて恋乃心をとらゆる
いふ初しことをのちれ心とハそれかあらぬかいぬかからもとう
とそふみて人とこふといへる心を
类題
それなをたゝかりそめに見しかよりつゝみもあへぬ物とこそおもへ
人なうらむといへる心を
うらむもこひしといふもなとけハ云きと存と水と水也
遠約束恋
类題
よもしとたのめし夫ことのなく秋ならぬれハうれしにあらる
歌絵に男の女にあひてる夕へにおもひのやりを示とよめる
おもひやるへやちにさそふらむたのめぬひに夫へうきなせ是

拾玉集一
数ならぬ[illegible]の浦のうらへ人は
波のよるはなをとこそ見へ

吳藍之八塩乃衣ハ万葉集以下あまた
よみて[illegible]しからぬを泪ハ深しと
とまれ[illegible]めてこそ

萬葉集十二巻
山河ノ水陰ニ生山草ノ不止妹ヵ所念鴨
水陰ハ[illegible]とよむ[illegible]
ハ古点ニつきて[illegible]

六帖二
よもやあの山の山彦なけまさらや
我よりこゑ[illegible]

堀河院御時ニ女房殿の堂にまゐりたまへるに
人の扇にまゐらせ[illegible]
[illegible]の池とみつるより浪のうちあふ[illegible]
[illegible]人のあまりに[illegible]
忘れ[illegible]
[illegible]
たゞ[illegible]
[illegible]
人の[illegible]
[illegible]

夫木五
[illegible]
山彦冊子云喚子[illegible]
[illegible]
嚶々筆話ニ三鳥の説あり考へし

程經るに布留川といひかけたり

東間に欄とそへ[illegible]
哥雜部[illegible]
帖[illegible]

述異記云晉王質伐木到信安郡石
室山見數童子圍碁與質一物如棗
核食之不飢局未終斧柯爛尽既歸
無復時人云々

夫木
[illegible]
別當[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
大貳長實の白河の[illegible]
[illegible]
[illegible]

詞花恋上　平祐挙

[illegible]

六帖四

あみのめにかゝる風はとゞまるとも
人のみをいふたのまむ

月上女經云羅網可用縛猛風
本緣經云如以網盛風是事甚難
催馬樂妹之門にひちきの雨もやゝ
[illegible]

名寄

[illegible]

和名鈔云兼名苑云織女牽牛西也
和名太奈八太豆女

[illegible]

夫木　恋ハイハイ

[illegible]

夫木

[illegible]

[illegible]

女恋といへる事をよめる

[illegible]

类題

[illegible]

後撰恋三

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和名鈔云四声字苑云箬ハ竹名也辨色立成云若竹加波多計本朝式用河竹二字今按箬宜従竹作箬歌金葉恋上　経忠

一夜といひつゝちきりしかハ外のかれてとこそ思ひそめしか

一本のうた宜し

栄花ゆふしての巻

あふ事のとこゝろまつなとふれとくれとこゝろけしきたにかし

それハうへしつゝ守とて

夫と我むとてまれハ河こけのかれてもみまうさふやまと

つまれくのみ侍る人のもとへつかしける

明くれハおふ事をたくみまてまり物くむまをしる人をかき

其の意といへる事を

おもひかはいく世の里をたつねれハ霧をさへもうらみつるかれ

冬恋

あふ事ハさゆるあしの水ゆまやとこゝろりつとくるよも物し

堀河院御時艶書合といへる事をきさせたまひける

りけイ

りつかしまつれる

神中抄云みをつくしとハ河口所とふ水の流き所を湊といふ或ハ識ともなりもとをのしるしにたつる木を云也云々

詞花　相模

経衡のほそ江にさせるみをつくしゆくさにかけぬ人ハあしれ

続古今雑下　土御門院

うさ世にハかれとてこそすれけれこゝろりそらぬ浪うれ

古事記中巻に夜須久波陀布礼。神示歌脇母古ハ口さもこふや一夜すくふ礼六百番歌合顕昭哥に独寐してやすくとかれなしかくよりり

伊勢物語

大浜のうちにおいてふみるうちにくハか岐ぬかうらハねとも

新古題しれ　艶也合

数ゆくてよふもみの江にみをつくしいつを月つとも物き世物りかり

身イ

この一し

中宮上総

艶

かうまてもあふ名ハたそしもみの江にみ我つくしにてたちハなれとも

こひイ　くイ　ても　くちはてかむ艶

又女ふめして男に結ませたるに　四条宮甲斐

新続古　艶

うさ世かう人もつくしと知ぬまとこゝろり物くもおつる浪ハ新

ハ艶

う無し

四条宮甲斐　左京権大夫艶

ナシイ

新続古　艶

かりそめにたえ身をさへやうらむつきことなり物きハ泪のみかは

まつ艶

たうむてあハすといへる事哉

夫木　奏題

かすみゆかれおもしふれてんハゆきね夫かゆきとも

夏恋

萬葉集十一巻
吾背子尓吾恋良久者夏草之苅除十方生及如
續拾遺集恋二端書いひわたりける
時ふ女ふつかはしける
續千載恋二　實衡
今こそはつれなかりけれあひ見ては
たへてあるへき心ちやはせし
古今恋五　宗于
忘草かれもやするとつれもなき
人の心にしもはおかなむ

（夫木）あふ事は夜殿にしける夏草のかりそめ人とおもはせしつ（寸大）
　袖さかへのたひ
（續拾 類題）あはれむかしこその秋くれぬ袖さかへはいひやらみさへ（やイ）わりなし
　あかれ行けれかた人のもとへつかはしける
（夫木）袖かひをみわたしきし山ゆきてたえて待へきことちなくせね
　更衣乃頃に人のもとへつかはしける
今よりは夜もまつれなき人の心かはらぬなしかな
　大貳高遠の白河の家にまかりて
きえぬへかへるあしたの別をもふこれとうらむる（よイ）はさりなり
　春は大夫なる實の家にて人〻恋の歌よみ侍りけるに

白川殿七百首　為家
代かけていひしふるそちきりゆゑ
みしらさわしの袂のみそぬく
新千載　御製
うらむる人のつらさのあまそゝみ
そてみかえりのうかものてらそ
擁書漫筆云曾丹集に蚕つくりと撰の雪をもとくへいつるの上毛を思はらむやそ同集源順へつかふまつりぬらるもられかふそ江のわしは無と分てあそふ雀の子散木集夏部に故大殿の北政所より歌結をたまはりてこれ哥よみあはせてまゐれと有ければ庭にへといふをのとむしかる雀むかひたりと云て同恋上に大殿のこれらの哥や詞書と考れにへつかり相作のまふに雀をよみ合せしは唐の相作女と云ふ相作は綜臺にて系を經めるものゝ
金葉恋上　物いひたる女のかみをとらさせてみけるとよめる
あかでみたるたるふたすぢつけて
けさは何にみふかうこしてみる
うつくしきかりたる髪を前の方へぬかこしてとかきたると云物語には多くかいこしてといへり

つらみてきけるみきはのさむしろにまくれぬて芦の袖とのみそぬく
　男の女にたえてふ事子かつなんとちられてかへりおかせたり
そらふかしつらけすこそかなしきすと（てイ）ふひされは
わかれてのちのみえぬれはまてつきのあきて残りけれ
　大殿の歌結中は男のつらさをつかてみるまで
ふかくひかりはあり人をいへるおあり歌むかひてかり
　からの女をかりあるかをよめる
恋しさをいそし筆をつてうきとし人とおもひゆるに（よかるイ）
　同結は女のかみをかたこしておこるかと
からかしし人の袂の恋しきふいてひかみをゆらりしつらむ

夫木抄　　　　　　　　　　　　　　　　　　匡房
玉くしけ二見の浦のなかときされあけくるふこそ物思ひなりけれ

神中抄云山鳥のをろのかゝみとは山鳥の尾のなかきにみゆるかゝみにとりあはするなり無名抄云おのゝこまちか尾の一筋にかゝみを山鳥の尾のかはみるとはいへり後頼哥に山鳥の尾のしたりをのなかなかしき事の如く誠の鏡とみるまてはよかるへし心をよくよく存てかゝれなるへし

拾遺恋四　　　　　　　　　　　　右近
わすらるゝ身をは思はすちかひてし人のいのちのをしくもあるかな

寄鳥恋

たまくしけふたみの浦にすむあまるたゝあけくれはねをのみそなく
人のうつり香
うた寐の夢ちにさへも我まとをそめてのちにたに忘れしとおもへは
おもへはなこそにたのめし人のこゝろをはよ
夫木
いとしくおもひきれは山とりのをのかけをもなかめつゝねん
修理大夫顕季の八条の家にて人々恋のこゝろよみけるに
夫木　万代
神中
山とりのをろのかゝみかけをならへてくやしき人を恋しきかな
香取殿にて人々恋のこゝろよみけるに
かゝりける人のこゝろはつらくてもむすひけん身をうらみつゝ

六帖三
淀川のよとむと人はみゆれとも流れてふかき心あるものを
山集雑上
いにしへのなにはの浦の藻塩草かきつむるこそ何にかはせむ

新撰字鏡云嗔懀也責也阿也矣
喠一作喠

方言云凡物盛而多齊東之郊謂之夥
後拾遺恋二　　　　　　　　　和泉式部
津の国のこやとも人をいふへきにひまこそなけれあしのやへふき

晋書云張翰字季鷹呉人有清才善属文而縦任不拘時人号為江東歩兵既入洛齊王冏辟為大司馬東曹掾翰因見秋風起乃思呉中菰菜蓴羹鱸魚膾曰人生貴得適志何能覊官数千里以要名爵乎遂命駕而帰

あはれわひことしもいくせとや身は淀川のよとむにも似て
河しはの難波の浦はうつせ貝いくよへぬらん
雨中待人
類題雑一
雨ふりし日はあやなくまちしおもひたえぬやそれ音つれもせぬ
寄虫恋
夕かけに月のなかめてたかきしたふ恋さへてゆる
恋のなかをもちぬる
やへふけるまやも雨にいとゝおもひにかゝりぬる恋の涙かわかなむ
こゝろよわくも人のあふこのなきをへて
夫木
類題
秋風にあきそかはすおもひしもゆきさえかむ人のなかちこそあれ

韓非子云楚人和氏得玉璞楚山中云々文王即位和乃抱其璞而哭三日三夜涙尽而継之以血云々悲夫宝玉而題之以石貞士而名之以誑此吾所以悲也王乃使玉人理其璞而得宝焉遂命曰和氏之璧

恋乃んをとゝゆる

もろこしと物にせひそむさとられぬたゆふなきそむ人乃涙を

拾遺集賀　鏡いさゝ待なるうらにつるのうさとやけさせ待て　いせ

子年ともかゝいのしむうらにまむたるのうへとそみるつりなる

加茂保憲女集

ゑしけ鏡のうらにまむ子をおかつり物みまとふしとゆく

夫木鈔　清輔

たゝ山にかれしたゝのうさなれ

ゆくへもしらぬこゝもとるかれ

下につゝさも人にかれしうりそり

ともよめり

橿下技云それとも不過心えつゝ云々此哥

来る人の心にてやうやうかゝる例ハあれと

も猶此題ハ題林抄に思人の我方へ来り

ぬうら誠にハあハぬ也といへるんハにて

待えらるゝ人のとゝゆゝぬ心にかゝる多し

散木弁謌集 巻イ 第八

恋部下

修理大夫郎季代八条の家にて人々恋のうたよみ

そらにとゝゆる

夫木

ますらみうらつるひきかさきにのイ　ふんかうろ夫さの　初代みるつれ

よくともこのつらすといへる事を

夫木　万代　奏題

みかり　ぬにかされかしきるもし　セイ　ぬそ　ぬうらみをそれきる

過恋イ

次不遇

きの絶つることをふことのかけるにハつらさそうりやうれうらあし

くもともあれす

萬葉集十巻
道ノ遠草ノ冬野丹履干吾立侍跡
妹ノ告ケム

催馬楽道口
道の口だけふのこふ我ありとやふ
ナたゝんあひの風やさきむさちや

顕昭注云ふくとはくさのをけふ
とくさ草をさくさのをけふ
夫木抄雑五不逢恋のこゝを

新云ひさかた秋の重陽の菊酒を
飲む花を吹のあるを云ふ重陽
さても九月を花ふく秋とはいかゞ
あるべき〳〵極園日記詩に歌の
證を引て辨じてふ猶よく
心注秋の字の処よくかんがへ

續千載恋四　　豆則
秋山ふかき方のしをりせで
いかにもわびをとふところなれ

和名鈔云文選注云纏佐綱加茂祭形
狭後廣前名

題しらず　　夫木
人をうつまがのうやそうぢ川のわたり
ゆくみちもさゝ
思不言　會ィ
心あひの風のめやをやまもさゝなびよ
神中
人をうてこふ

夫木　なイ
そのうらにあるものをふくりあてゝいもとふれこやねー
中納言俊忠のうつせ山里にて恋のうた三首よみけるに
ふみさる人にいへる事をよめる　ヲイ
ふみさるといへる事をよめる

千　恋
夫題
あちきなしやたれもおもふてふ名やはへの寝がうき舞

皇后宮権大夫師時の八条の家にて歌合
十郎ノ子
山家哥合
こゝろをばむつ国のとふさとをれ雪のあさ夜うた

揚のくゝさくの事奥儀抄袖中抄
などふ哥論ぎを引てへり

王勝間云夫木集　待賢門院安藝
恋をしてふしなの床ふなとろもて
やすらひさすよ八の旅をよ
やすらひ〳〵の世やー言詞ふのう
又のさう川敷とふ所也
雅言集覧云めさ猫の卧所を云東人の
やすらひ卧ふ云是ふけー

六帖六
あちきなしやたれもおもふてふ名やはへの寝がうき舞
四枚ふ宵ら立てさう夏の哥ふもあ
らさふの花のよいらふてる月のとちう

続世継六雅巻恋の哥ともと恋てさそ
ゝせおもりくる又ある白雪のうへかく
る我心うう思ひやりたまさかるー
とゝえていとと
拾玉集
そらのわたそてく代ふかりやー
恋をとゝてもせれるる名ら

人をあやまちまうてまうでゝ参りてあやまちたる事のあるを
夫木　ちイ
ちゝーあやまちたる事のあるを
殿下ふて歩乃そよ申給ふつゝ
夫木
更ふてあのうもより
若た橋作基彼の家ふて歩乃ふをよめる
てふれ浪ま立ちうあくるのつれもるやかゝる舞
あを落作那仲の八条乃泉の家ふて人〳〵十首の歌
よみけるふ
夫木
あちきなのをのよひふまつれてかそいれのあれかまけそうりて
一本元
一のをあー
金葉
やこれよそのさあそとよこひせそそもせれそうそも

胡つ毛ふめれふ一神代ほそか宗
やうてゆふすれうふ浪うれ

萬葉集十一卷
酢蛾島之夏身乃浦尓依浪間文
置吾不念君
畧解云酢蛾島ハ塩津菅浦くよめる
近江淺井郡ぞこゝろ得ぬ所ぞある郡名
鈔同国甲賀郡小夏身郷あり右と合
ぜて近江ぞむ又或人今阿波と他伊
の間小ろ嶋とあるぞこゝ
朝臣ハ近江の名所とよまれたる歌多け
れ共皆島夏身ゝふ淡海ぞ事うけ
ず一

万葉集十九卷　家持
礒上之都万麻手見者根乎延而年
深有之神佐備尓家里
若冲云つまハ越中の哥なれハ万言
ゆへ一これハ樹名都万麻と自注せ
もうり

又人よりうて
万代
恋をそ名(ヌイ)をもれ夜とふへきやうもうれみてこう邪
恋の跡そて
波河のけまそうすおそてれいの浪まやうを神こう乳
人よそつる恋といへる事を
夫木
これを考んの母ふもるし恋をそ河みのうらみてそ(ウ夫)(ウイ)
障　本夫恋
類
いそ川波もそれかそて
かへることをそうらみをはるいへる母　もる
つゝとひとれいたつう

万葉集七卷
妹門出入乃河之瀬速見吾馬爪衝
家思良下　二句入出見河の誤ぬ一
旅人と家ふて渡く妻もれハ乗馬つ角
うかりひ一奥儀抄ふ云り

二句からふあゝて六万葉集ふ天雲乎
冨呂布美安多之とあるふよりれたる
う夫木抄ふ堀ふ法一てとからうふや
結句ふるひふるひの浪や

萬葉集三卷　赤人
阿倍乃島宇乃住石尓依浪間無比
来日本佛所思
論語云唐棣之華偏其反而豈不爾
思室是遠而子曰未之思也夫何遠
之有
顕季集ふ本ふのかきちとみ西行の
哥ふはきうてれいもかさのけ改一も
とうかきちなきうき山路ゝ今も来ハ
山辺ふてかきちこふ繁葉人ハかきて
之とそ見ふ長う東山遠西嶋記の序ふも
かきちてひふ岐嶋路をとそとかえう
されいちつのかさふ統紫の方言もてよ
れたるふてうちう

○散木集

思夫
類
おくれそてそやみちそうふ的のつ女川くそ一そうう森
人ふ一くうく恵
夫木
まそ(ヲ夫)の板をかろまあるーそ(ヲ夫)
競人恋
類
浪をそふんを一ふかけつ(ク)れいあひそれていうれそうう(ハイ)
雑休恵
夫木
類
ゆるみそうのそも磯(岩夫)おそ
恵遠人
類
ちりのうそちのつそもこそ恵一それおゆる(ルイ)ふかう

朱淳與彭罷書曰伯通自伐以卯為
高天下往時遼東有爲生子白頭異
而獻之行至河東見群豕皆白懷慚
而退若以子功論於朝廷則為遼東
豕也

仁王經疏云梵云曩謨此云歸命
亦云頂礼
竹窓二筆云如梵語南無此云歸命

西京雜記云匡衡勤学無燭鄰舎有烟
而不逮衡乃穿壁引其光而讀之

相思恋

類題 わすらるゝ身とそうらめつゆ
ふかきのこるあきの夜の月

後朝恋

夫木 そをたのむ契りやあくれてうき我身ようらめしき朝
戀の歌として

あさからぬちぎりなるとは
不見書恋

類題 なくけんそこ
夫木 をしてかきりのかいくつせ共
ひろふ

寄鯉恋

類題 おもをおもてなみそありとみつるうちのみ
恋のうらくてとしもへぬる

夫木 秋ふかみそきの討多ろこをけ方ろをこなやつまいまゝ
夏下そてきく恋ていへる事をとゝめ

夫木 秋の田のかりそめにおひもあへぬ稲ろて忘ほけろ

類題 寄小児恋

あふ事はうきこゝろみとりこめてゆめ
寄鯉恋

夫木 おもをおもてなみそありとみつるうちのみ
恋のうらくてとしもへぬる

莫傳抄云恋草心なるべし八千つゝもあらむ恋草のたゝえは袖の涙にあり

志ゑのとみ釋教部に已注

志ゑへ新撰万葉に指南とあるべし日本紀には導者をシルベと訓り

漢書地理志牂柯郡注云牂柯係船杙也楚莊蹻伐夜郎掾船於岸水戰既滅夜郎以掾船牂柯處名為牂柯かしはやひ杙之雜上にこさもとれり

万葉集四巻　廣河女王

恋草呼力車二七車積而恋良久吾心柄

かたらひきる人のこの比いうなる事にうきもあをみおとろへたるは物とやしられはかゝるへ

恋草にまさみなへりたるゑ物是はおりひそめそむ日をそうらむる

稀通恋

类題

むらしゆのとみ物にはやそし毎にたえ毎ちなる恨を毎しや

殿下にて推量恋といへる事を

类題

大きこのんにくさをしきへにてあやふくものをそふころ物

海路恋

类題

恋草をさしふにつゝる舟物是はかしもみとろしくしをしかみ

女のうりつゝりしなる

續古今恋五　伊勢

うき事をしらりしこゝに出れたつゝきも人のかゝみなりけり

倭名鈔云釋名云上曰裙下曰裳　和名毛

千載冬　顕輔

かふなく入にをめくるあしうものむものとこふうきもしらしも

風雅

悲しさに身のうき事もまたられつゝきも人はうれしかりけり

大殿の別繪に山里に見しき屋のつゝみに女ゐとり

泳てゐたる所にをさ物きちこぬしうりそのうたちに

女のきる物といふものをおきたりまへに田乃　たゝに

かもといふ物ひとつゐたりまたいもしとおりしきかり

こゝのつとひたる所をとゝ物る

夫なつとたゝのとこにおきふしていくたひものうきゆしつゝむ

人のうりつゝりしなる

夫木

名の池はいりにの芋毎さえて　いけにはしきのうちもとくつき

つきなくのみ待なる人のうりつゝりしなる

○散木集

壬三集上
思ひ[illegible]身にあるむくいとて
後の世なれば[illegible]やしのもむ
たとへなどを同じく撓也

夫木
東路のおこその草はおひなくら
なれ人のゆく花をさきられ
勿来その意にかゝる歌おかし

新勅撰恋五
[illegible]
[illegible]ものを

さひたは幼稚なるを云り源氏桐壺巻
にてきひたはしたるをとゝ云り

風雅
[illegible]

恋の歌とてよめる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人のうりつゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

寄花恋

心ゆくは俗言にいふ存分也又ムネガハレル
こゝろ心オモシロイともいふ意也

古今恋五
[illegible]

和漢三才図會云鼃鳥和名久比奈
夜鳴達旦声如人敲戸蓋在水辺告
晨故名水雞

我こゝろ人にみせぬの産さへ[illegible]

[illegible]の恋

[illegible]

梅の[illegible]

[illegible]

寄水鶏恋

[illegible]

後胡[illegible]

[illegible]

寄酒恋

萬葉集玉ゐ小篠之十鶏吉仁入通、来根足乳根之世我間者風跡将申
一句をのみ付きてとかくいふ事なし
きくらんとあるにきくらんとをかけ

新撰字鏡小羊蹴躓毛知豆と自ところえ和名鈔に以波豆と之一云毛知豆と之と云
記傳云此許豆良比引之今世の言ぞも引と引豆流と云豆良比即ち豆理を延たる之
とより仁伊呂波字類抄云撃子ヒッコラの「擢」歌林抬雲ひて一ひ一ひ両方へ引あ心也
やわらげくらといふ物やわらげてひくる

兵範記云久寿三年三月云〻去年四月頭輔卿薨於六条大宮云〻

六帖立
紅ふぢの一衣もたのみそめ
人をあくまでとふにつけても
古今集又をあくまでとかけるもとうれ江の縁

類題
よのくいそひきそふもてひそもらそし

経年恋

夫木 神中
ふるとしのすけくたにたまりみそつくるおもけふ哉
躑躅恋
修理亮重保秀の訴訟を申て罷出侍りける事を
かかる守部埴の家にて人々よみける歌のを
かつらある我妻ゆへもとりやとそ
初恋
神まいてひそめてれいらなるのあけかくてふりやとそれ

神祇伯顕仲家にて逐日増恋といへる事を

日をへつゝあふ夜のさらぬ恋の
中絶を彼思ひつれそめとみそ
逢む事をうらめしといへる事を
神風やふつのそらなることをひてたつを多神つみてそくる
そらにも不留

夫木 神祇
金葉 拾遺抄 類題
無名 時代不同歌合
思ふそよそもむそも
神祇
小なのふつをみつれともみそけてそくしの
祈るとも不遇

萬葉集十巻
本国思飽寺漏之恋貝我者不忘年者雖経
神祇抄云或人伊勢大神の二角柏をえて帰参ありけるに道すがら思ふ事ありけるに
此柏の上に文字ありけるを見て神心を感じて収めしかば
三角柏の事 歌林良材古事記傳其外
諸書ふさえたり
続古今恋四
男のありそうの町ふるそそのしつもふるくそそり
続後撰秋下
左大臣
天川そうをのつものまふ
おもかけ氏よ
無名抄云見ハ面白く見所ありて上手の
しそそ
新千載恋三
為子
さらぬふるさむもれやく小車乃
ふるさの絵てそけてそひるさ
小車の錦の紐は久恭天皇の御製ぶれり紀友神抄 続古今集等考へ
近来秀哥又井蛙抄云此哥心浄く詞心ふるてそ多ふるつけてそ泓ふ乃ふまき姿也

世哥の事百人一首の注ども考へ
拾遺集　長能
我たのめの神もなりこそされ
人のこゝろといのりやはせし
萬葉集　礪波郡雄神河辺作歌家持
手如未河泊久礼奈為尓保布　手等
賣良之葦　附菅流登満尓多々須良
之葦　附水松之类
和名鈔云越中国礪波　止奈
美郡

金葉集端書　俊忠卿の家にて恋の哥
十そくさうみそくふもの〳〵そのおり
とつくすとよめる
後撰雑一　あふ事を住吉の松名にたてゝ
名立ちそ浦よりこぐ舟をふるむ口
のふかけてあれてよまれたれ
かもやくとそつゝめるくむ
或人云けてたゞけてもの浜ふかしとも

千載　类題
うらなく人をそらめやうはの空
百人一首
逢従恋
大本誰七四十
我ならぬ神もたのみをかけねばや
类題
かりそめふしやみをさそふあふ
いやきをいつ
金葉　後葉
あやしくもうれしかりけるかな
夫木　类題
かきとめてそらひけてつひおもひ
类題
そらけくそらひけてつひおもひ
別帝実幻の二系共あて恋のこと

山家集上
つく〳〵そひともやう我身ふれ
あさ日のかげより外にたのむかな
六条宰相家哥合　十五番左　俊頼
つくく〳〵我身よりほかにたのむかな
修理大夫上
右
知らねやうそのつき橋とるふみ
又たのうきなかりてそ
きなりそもほい
をそかりそもは雖令沙汰之あさ
るめくの俗ふれもそれもかりし
けりてくは涌出て古事記に漏逃而去
も自我手俣之波斯子せんそ
釋氏要覧云凡寺院有開三門者
有一門
浮屠氏の説に教律禅も三門とそう
又単門廻門路門と三門とそう
和名鈔云唐令云庶人門舎不得過一門四下
三品已上五架三門五品以上三門閤下

金葉
河とめく恋ふるく我身よりたつやあさ日のかげりなむ
かくもむのうらなみ
恋のこゝろをよめる
障子
百年夫恋
たゝへこゝろをそやつをる夫ていめるやをとあされをそもる
大本
类題
たゝへこゝろをそやつをる夫ていめるやをとあされをそもる
殿下にて寄水恋
うらやまのうらなみ等水を恋と云事を
美作守顕輔あて恋を

萬葉集二巻に野上乃宇波疑とよめり和名抄に八薔薇一名蕺蒿和名於八木とみえたり
正月ノ歌にしもありて[illegible]根芹そ

塩飽山ハ美作国久米郡津山の坤にあり
と云り千五百番哥合讃岐哥にもきさ
れ山の夕ぐれの声とよめり

千載集冬　俊成
月さゆる氷のうへにあられふりこゝろくだくる玉川のさと
玉出島の事今案名蹟考にみえたり

夫木　衣笠内大臣
君をこそわきてつむ[illegible]のこゝろにかけてつむ綾のいしみのしみふかく思へ

式部卿のみこの歌合に
敷しきて十首[illegible]ぬせたりけるに恋の心を
いつしかとすゝむれは[illegible]いつかせ[illegible]の川なり　好忠

まつ川まり

みのみつるる恋やまつしまかなる波の[illegible]なりける年

夫木
おもひ敷しきて人をうらむといふ事を
みちしるやきその渡りもむすふほしかれとおもふ[illegible]

後堀河院の[illegible]里にて恋の心を
[illegible]の[illegible]風吹ハなひくなくさむるものを

夫木　類題
関路といふ事を
みちのくのあふきの関もはてはせきとゞめぬものは[illegible]
中納言國信の坊城にて人々歌よみけるに
恋の心を
たねもなき恋のこゝろをみなせ川[illegible]にたえてしのひ[illegible]
別所実行家にて恋の心を
恋しとはかつやらしとそおもひしをいかにせむ[illegible]
大納言續哥林良材
後堀河院の御時恋の心を
けふしたる代々のこゝろをみなせ川[illegible]
[illegible]

俊秘抄云昔男ありけり女を思て深く心ざして愛しけるほどに夢に此女の吾ハ逆形なり…[illegible]…鳥になりて飛出て遥に南の方に雲につきて…[illegible]…紀国に到て…[illegible]…水の…[illegible]…川也…[illegible]
詞林採葉手束弓の条にいへる事も俊秘抄と大同少異也さてこの別の歌を引ていへる事あり本書に就て考へし此等の事もと今昔物語に出たり

和訓栞云動揺するをゆするといふも…[illegible]…より出る詞にや古今集に紀の川もまり行水の…[illegible]…又大海の水底とよみ立浪とよめるをよみを…[illegible]…同語にや

武蔵野話云堀兼井 父間郡堀兼村にあり其地の鎮守淺間祠あり側に埋井あり是を堀兼井といふ側に石碑あり

六帖二
むさしあるなりなの井の底を淺き思ふ人をたゞにたゞしくむ

金葉集端書 寄關恋とよめる
上の名古曽關の恋の哥に
東路のなこその關は我らかな人の人の名にこそ有られ
似るいひなし

新千載恋一 為世
つむとも思ふにかへる夜泪とて
おきつる袖の名やかけらむ

それはまゐりて西中 恋しいへる事をつゝりまつ
里を隔て 恋しき恋の心をよみたる
夫木
淺からず思ひこそは南のめうせなりなの井の井につゝ事しき男を
大貳長實の八条家にて恋の心を
金葉
なこそてしかしとは夫らまゐらせしさを舞の名をもしひたるこれ
京の御宮に人にかけりて
うれしとやなくさ人の思ひ事し後に恋の心何るよ知らは
恋の歌とてよみたる
つまも知き人のゆかりにもしらぬ物をさへうらみつるこれ
なく後おきつる袖はこれ知るにそこのみとや人はみるらむ

大貳長實の八条の家にて晩恋に以會る事を
住よしと人のすみてくらしまつ後をうけぬ日を知き
たゞ京大夫經宗の八条の家にて恋の心を
夫木
あひそめよそもたゞにてはこゝりはこむとこのめしなとにたゞさし
中納言雅定の八条の家にて共を障恋といへる
ことゝ
类題
淺ましや夫のみことにしたつけて知るのてなをは恋らぬ物なり
隆理大夫所季の物ささ院にて恋の心を
夜てふ人も後りしおかれてともしき神をくるしまつる
雨中恋

後拾遺雜五 和泉式部
歸さをなりたゞにまつ
よもなにてはやなしれの里

伊勢集
さらはなと別し時にいはなせさん
これも泪よおかれなしと
後松中納言お俗云我もおろしと注
ことゝに泪ふおかれて出なるぬるこそ
古今集長哥波のしるにやおかれむ
悲歎部 夫恋る泪の泪ふおかれて

夫木抄　家房卿
さゆりと波うちけるゐ子の車と
わらひつねと見りぬるかな

史記賈誼傳云前車覆後車戒秦世所以亟絶者其轍迹可見然而不避是後車又將覆也

万葉集に天霧相天霧合などよめるはあまぎらひ
さしくもりて後世はあまぎりとよめり
あまひともあり

萬葉集一巻　阿閉皇女
此也是能倭尓四手者我恋流木路尓有云名二負勢能山
あげはあけやりふるのをとなど云て彼の
ためのせのきひは在に来しとて
はまさて進む方にも　六帖
あるはあるのせきひにかゝらはて
かくて人はこひしかりける

類題
夫木　雨の足
隙もなくふりくる雨のあしよりも数ふるにつきぬは人ぞかなしき

おほなみして男にさられて独ある人は男のもとに
やるとて母のともしくてひつけける
この車はよもめぐりくるまきの車わたるひともへば

寄月恋

もそしき恋するはの月うけはさき身とさるをのみかかる

寄山恋

夫木
あさぎりあひみつのさきにともれて行なはせ君にかゝせの山　寂蓮山夫

中納言雅定の六条の家にて歌合しけるに恋の心を
きもさきふかけのなさけにつもかれあるのたきひの杉とやはみる

寄草恋

続後撰
万代
あさふりみみらけ草の下露やもとねね恋のたよみさすらむ

金葉
別當実行の六条の家にて歌合に寄泉恋をよめる

新千　夫木　類題
こひつ恋はわかの清水はそこえてせきやるかたもなくてくりけり

殿下にて寄海恋を

夫木
ちぬの海潮にさよふかきみるのうらをとみるそこもしらりけり

右衛門督殿にて三首の歌合せに寄恋の心を

夫木
ほどもなや雲井かくれゆきむたるも見ゆ人にはみえけるものか

修理大夫顕季の六条の家にて雨中恋といふ事をよめる

類題
ふる雨のあしたれそはる見りまとしけき恨はたゝねらしかし

萬葉集十巻
天漢水陰草金風靡見者時来之
この水陰草はみをりかさとよむときや
かれを旧訓ミツカケ草とよみ来れり後世
ふるけさとよみすくる根さし正一
葉まうそえなり

新續古今恋一　実遠
そこさのさ山かくれのほかのかさや
きらはぬ思ふにおつる涙は

金葉集端詞　後胡のみとよめる
新千載端書八条太政大臣右兵衛督に
侍りける時家にて歌合に寄泉恋
無名抄云俊恵云法性寺殿にて歌合有ける
に俊頼基俊二人判者にて名を隠して当座に
判しけるに俊頼哥にくちをしや云を是を
基俊にくみてたづねにこそこもらめ
わしてたりされと俊頼甚だ不詠加へ
雲井にもむすやはへと難してすけに
こゝ其時殿下今宵の判の詞各申て申ら
せとて侍られける時俊頼俊頼是は
鶴にあらず龍なりかの何某とやが龍を
見むと思へる志の深かりけるにより彼か
為に頭見えたりし事の侍るをよめる
へとやうなる基俊弘才の人なれとも
思ひよらぬ人の事と難じて
癖の侍れは申に及ず共多くそれなり
詞花雑上　和泉式部
あしかれと思はぬ山の峰にだに
おふなるものを人のなげきは

新撰六帖
白つゆをつゆも人にこゝろふれよ
ふたるゝひとおやめもそする

今案名蹟考音无滝の考あり

拾遺雜上　續千載恋四
年月は昔にあらしなり雨けと
恋しき事はかはらぬ

万葉集十巻に吉魚張能浪柴乃野と
あり持統天皇紀に幸菟田吉張とあれは
大和国宇陀郡之浪柴も其処歟之し

藥名備考和訓鈔云アヲサギ青鵜

恋のんなよらぬる
恋をもとも身(てイ)のけしきにかはらすはいそぬ(なイ)に人のあやめ知しやは
春歌しの滝のこひ
夫こゝろと名にはかれておとはしの滝は恋ら糸法は絶ゆ
いそての罪乃恋
夫木
人めもるいそ侍の開はかゝられと恋しき事はこ(たイ)ゆらさりけり
大訃(仲イ)毛実の白河の家にて恋のんをよめる
夫木
浅白しやなみしその地にたつしのつちのそれのみぬるゝ袖かれ
寄馬(鳥イ)毛恋といへる事と
夫木
藻もあらはをくろうるあをさゝれのこゝろしとこそいはなかしかれ

和名鈔云玉篇云鳩和名豆木赤喙自呼之鳥也

萬葉集五巻貧窮問答歌
綿毛奈伎布可多衣乃美留乃其等
和和気佐我礼流可可布能尾肩尓打
懸云々
ゆけは衣の破れ乱れたるを空穂
祭使巻にこめのきぬのきけしたる
といへり古今著聞集にまゝくりといへ
ても乱さるゝ意とはしられは同語
歟之し

○散木集

又おなし題にて
类題
おれといへはあれてそこゆるゝ鶉のんは人につきけ歟是歟も
大京大夫經忠の八条の家にて恋不依人といへる事をよめる
一本无
くれ歟あの袖にそこゆれ知みよりもたれかつりのまゝけ(ちイ)をそおもふ
夫木　类題
隆理大夫歌季の六条の家にて恋不知程と以無る事をよめる
类題
せきもあへぬ波にてこそ我恋のつきれるかとをしるへかりけり
男にまゝ(ちてイ)られてなりて人の知る歟さ名をさへたちて
うらみ々るその人乃かりつゝはもむこそ宇こひかれは
かはりてとゆる
新續古
いことしくくちぬる袖にぬれ衣とひきかさしてもなりて比うれ

和名鈔云弘徽殿在清涼殿北 同云廊 漢語抄云保曽止乃
殿上ハ清涼殿の南にあり今ハ彼殿の西に並てあり

去歌にかうるけ玉田横野のをのゝ詞とあり
古今六帖第四帖の末に人の心をいつれをよむといふ下句に種との有ける
をひてよみたる哥三十九首をえうり
この十首の哥もその例と思はれたるや西行法師が山ふみといふ句を初に
おきて十首よみそへられる和歌寂然か

皇后宮は弘徽殿におはしましけれはそとのにて人々
ゆかしかるに女房あまた車のかきりして参見らるとおはし
てゝ女房の中にはたちて殿上の方へまかりけるを
のちにまかりやかてとゝ給へるにみえさりけれはよう
おくりて給ふ　大弐君
杉の間つれなきのよふかきを釣殿とおもふかなしきれす
こゝし
こりつれけみゝきの木枯を釣殿に世にあれて流も定なす
七月の晦日人のもとにまかりたりけるにかしこにて
おはさりけれハ京にと思はれハまかりぬべくてなさ

大原の里といふ事を結句におきてよめる十首の贈答山家集にみえたりこれもさるしきならひなりし

新古今恋二　後忠
かき名のみ立田の山にふる雪のゆくへもしらぬ恋もするかな

新拾遺秋下　後西園寺
夕されは雲にまかれてたつ雁のゆくへもしらぬ秋風そふく

拾玉集三
夭からめくるかすみに波のゆくへもしらぬ恋もするかな

新古今恋一　式子内親王
しるへせよあとなき波にこく舟のゆくへもしらぬやへのしほ風

さりけれハ書あつめて家におかせ給ふ
朝しめくたちもとまらぬ秋霧のゆくへもしらぬ恋もするかな
風吹ハ峯にわかるゝ白雲のゆくへをしらぬ恋もするかな
山のはにあかすいりぬる夕月のゆくへもしらぬ恋もするかな
はつ山の峯ふきこゆる秋風のゆくへもしらぬ恋もするかな
きえし中は友よひかはしかりかねのゆくへもしらぬ恋もするかな
妹の野花とをみの萩子おく露のゆくへもしらぬ恋もするかな
山河の井くひにかゝるしからみのゆくへもしらぬ恋もするかな
大その浦にこきはなれ行釣舟のゆくへもしらぬ恋もするかな
としふやくあまの苫屋に立煙ゆくへもしらぬ恋もするかな

夫木抄　公朝

木をきさみ縄をむすびし古も
世をくさものと人やいひけむ

繫辭傳云上古結縄而治後世聖人
易之以書契百官以治万民以察蓋
取諸夬

史記云造書契以代結縄之政

夕されハ夜ふかくもむらきのけ（たなゝ川イ）へもしらぬ恋もしらふ邪

恋の字よみ名ゝ所にてよめる

木をきさみ縄をむすびし昔よりつひにハ（えイ）こけてみえ名ものを

ר ר